



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2024第889回

今年の総括－世界と日本 PART1

R6/12/24

パネリスト：

荒木和博（特定失踪者問題調査会代表・拓殖大学海外事情研究所教授）

石田和靖（国際情勢 YouTuber “越境 3.0 チャンネル”）

宇山卓栄（著作家）※スカイプ出演

富岡幸一郎（文芸評論家・関東学院大学教授）

マックス・フォン・シュラー小林（元米海兵隊・歴史研究家）

用田和仁（元陸上自衛隊西部方面総監 陸将）

司会：水島総

水島「皆さん、今日は」

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！2024第889回目の討論です。今日は、今年、2024年の総括ってということで世界と日本、パート1として、皆さんにお集まり戴きまして、今年1年を振り返る、或いは来年の方向ですね。どういう方向にいくのか、トランプ政権が誕生するということで、ご出席の皆さんも色々想像して予想した方も居たんですけど、大統領就任までに色々起こるんじゃないかと言っていましたけど、やっぱりシリアの崩壊とか色んなことが起こりつつあると。

韓国でも、また政変というか、こういうものが起きているということで、一体、これから、どうなっていくか、今日は皆さんと共に今年の1年を振り返り、且つ又、来年を展望するといった議論をしてみたいと思いますので宜しくお願いします」

一同「宜しくお願いします(礼)」

水島「それでは、ご出席の皆さんをご紹介します。元陸上自衛隊西部方面総監、陸将の用田和仁さんです。宜しくお願いします」

用田「宜しくお願いします」

水島「特定失踪者問題調査会代表、拓殖大学海外事情研究所教授の荒木和博さんです。宜しくお願いします」

荒木「宜しくお願いします」

水島「元アメリカ海兵隊、歴史研究家のマックス・フォン・シュラー小林さんです。宜しくお願いします」

小林「宜しくお願いします」

水島「文芸評論家で関東学院大学教授の富岡幸一郎さんです。宜しくお願いします」

富岡「宜しくお願いします」

水島「国際情報 YouTuber “越境3.0チャンネル” 石田和靖さんです。宜しくお願いします」

石田「はい。宜しくお願いしまあす」

水島「そして、今日はスカイプのご出演です。作家の宇山卓栄さんです。宜しくお願いします」

宇山「宜しくお願い致します」

水島「今日は、このメンバーでお送り致します。今年は色んな事があったし、来年はもっと色々なことがあるんじゃないかと。トランプさんが打ち出している政策、まず、非常に目につくのはFRBに対する挑戦。ビットコインをやるとか、こういう経済面もそうだし、連邦教育省解体とか、FBI解体論者を長官にするというね。

それから、最近、敢えて流しているんでしょうけども、民主党系から流れているのは、イーロン・マスクが本当の大統領で副大統領がトランプになるって、トランプが一番、頭に来そうなことを色々流したりしていると。こういうような状態で、イーロン・マスクという人の存在、20兆の資産を持っているって物凄いですけどね。我々の国の防衛予算は、ちょっ

と前まで年間5兆円ですもんね（苦笑）」

用田「（苦笑）」

水島「こういう、いかに凄いというね、あのテスラを中心に持っている人が、やっぱり経済陣として入って来ているっていうのと、もう一つ閣僚となる人達が、意外とみんな、経済とか実業の世界を経験した人が多いということも含めて、トランプ政権が世界の流れを変えるんじゃないか、所謂、500年の歴史、まあ、西洋の近代史、自由、平等、博愛、こういった国民国家論の中の価値観が変わって来るんじゃないか。

エマニュエル・トッドが既に一番、大事なことは、ミヤシャイマーが間違っているのはヨーロッパに未だ国民国家が残っていると思っている事だと。もう既にヨーロッパに国民国家は無い。こういう言い方をしています。

そして亡くなられた西尾幹二先生が、これ、私は最近、よく使わせて貰っているんですけど、アメリカという国は建国以来、国民国家となったことは一度も無いと。常に世界であったと。それ自身が国民国家じゃない世界。こういうような書き方のアメリカ論を展開為さっていた。

そして、もう一つ、改めて言いますと、西尾幹二先生が最後の著作の中で、日本の将来について予測している。『日本と西洋の500年史』のあとがきに、どうなるんだって言ったら、ハワイになると。皆さんは驚かれたと思うと。ハワイ州ですね。つまり観光と軍事の無い、そういう消費に頼る国になっていくということをお書きになっていましたけど、大変に素晴らしい本だったと思います。

500年史っていうのはね。こういうものを考えた時、やっぱり、今、時代が本当に変わりつつある。それと、もう一つ、ちょっと紹介しておくんですけど、アレクサンドル・ドゥーギン (Aleksandr Dugin) というプーチンのブレインの一人。西側から言うと、極右の政治評論家と言われているんですけども、この人が、この間のシリアの問題について、シリアの政変、あれは勿論、政変したんだけど、これでイスラエルの半永久的なアラブ支配と考えない方がいいと。

イスラムというものの問題は、西洋の価値観の国民国家論を言う人達とは価値観が違う。だから武力とか経済力とか、こういうものだけでイスラム世界を判断したら間違えると。こちら、正気と狂気、狂気っていうのは、つまり、アメリカの今迄の政策を言っているんですけど、正気と狂気の世界だから時間が経つと、必ず正気の方に、また、あっちから得て来るといような書き方してまして、文明論的にも今、端境期、転換期の中に居る。

アラブはアラブで一つのアラブって言うか、イスラムの世界は、そういう世界なので、今日は石田さんにもお出で戴いているし、宇山さんも結構、色々周っておられるんで、この問題についても考えてみたいと思います。

世界というものと国民国家、みんな、一律に国民国家って言うけども、トッドの指摘も結構、EUの解体を含めて当たっているんじゃないかっていうことが色々あります。それから今年にはウクライナ、パレスチナと言うか中東ですね。それから今回、ギリギリで朝鮮半島。世界中で紛争が起き始めている。日本は結構、脳天気にならないうね、別にこれをやっちゃいけないってことを言っているんじゃないんですけど、これだけのことをやりながら国会の中で議論があがっていないというね。我が国は極めて稀な国になっているんじゃないかということですね。

それと内政で、こういうことをご指摘される方が居るかも分かんないですけど、最近、石破が、もう駄目だと、玉木さんが三党連立で総理になるんじゃないかとか、リアルな話として語られるようになってる。こういう状態でございます。

そういう意味では、まず、皆さん、今年はどうな年だったか、簡単に皆さんにお話し戴いてから議論に入っていきたいと思います。今日は問題点として、私が企画したのは、そういうことございまして、他の話でも全然、構いません。そういう中から世界を見ることが出来ますから。そういうことで宜しく願います。じゃあ、用田さんから願います」

用田「私からでいいですか」

水島「はい」

用田「大丈夫ですか」

水島「え？」

用田「久しぶりに、私からでいいですか」

水島「はい、やってみましょうか」

用田「(笑)」

水島「じっくりと、いつでも出来ますから」

用田「ちゃんと時間を守りながらやりますんで」

水島「いやいや、大丈夫ですよ (笑)」

用田「今、おっしゃったように今年の総括ということですが、基本的にアフガンの撤退」

水島「はい」

用田「あのムチャクチャな、まあ、その前の当然、バイデン政権が出来た時からという話になるんですけども、表にわあっと色んなものが出て来たのは、やっぱりアフガンの信じられない撤退」

水島「あれはビックリしましたね」

用田「あれはアメリカというものが、えっ、こんなものかと、で、尚且つ、それを失敗したにも拘らず誰も処罰を受けていないと」

水島「うん」

用田「まあ、これは大変、異常だって言った時に物事が始まる。目に見えるようになってきたと」

水島「うん、うん」

用田「だから、そういう意味では、今年というよりも、この3年間ぐらいの一つの流れの中の大きな総括というやつが一つあるんだらうなっていう話と、それから今年は未だ変換している最中ですから、来年、どう繋がる。特に私は軍事の側面から話をしますけれども、アメリカというものと中国というもの、トランプ政権になった今の中国の習近平政権、大国同士

の戦略的なものの見方」

水島「うん」

用田「日本みたいに、隣に居て脅威をもろに受ける国の見方っていうのは、違うはずですね」

水島「そうですね」

用田「これが、もろに出て来るというところは、これは後段、時間があれば話をしますけども、取り敢えず世の中は大きく変わっている。私の視点で話をすると500年ぶりという話がありました。500年ぶりの地球の激震と、まあ、3年目とは言いませんけど4年目だろうなという気がしていますけども、一言で言えば非常なる歴史の振るい落としと再生」

水島「うん」

用田「アメリカは今、再生に向かって内部で相当な激震が走るんだろうなと」

水島「うん、うんうん」

用田「だから、彼らは内の戦いで相当、力を使うだろうなと。しかし、いくつかは良い方向に持って行くだろうなと」

水島「うんうん」

用田「振るい落としっていうのは、落とされるのは日本だと思っていますけど、下書いてあるように戦うトランプとプーチン。今迄、プーチンは一人だったのがトランプも加わって戦うようになると」

水島「うん」

用田「翻弄される、舵もなくて潜望鏡もない日本の悲劇と。これが日本だろうなと」

水島「うん」

用田「正に舵も潜望鏡も無いという流れの中で、日本は意志も無く漂流していると」

水島「うん」

用田「それで、これは色々書いてありますけども、地球の激震というのは、ならず者国家が見えたっていうことを、私は書いた。ならず者国家ってイギリスとアメリカだった（笑）」

水島「うん。うんうん」

用田「アメリカっていうのはバイデン政権のことです。トランプ政権のことではありません。真っ当な人達は居ますから気の狂った人達も居た訳で、イギリスが今回、ウクライナを含めて相当、仕込んで来た訳ですね。ここに見えたっていうものは、2022年にウクライナ紛争が開始っていうものが、歴史の変わり目だと思います。ずっと前から申し上げているように、これはゴングだと。」

だから、これが最後の反グローバリスト、要するにトランプを倒した後のプーチンに狙いを定めて、プーチンを倒して、そしてハートランドの支配権を奪還するという戦いだ」

水島「うんうん」

用田「今、日本の新聞だとか自衛隊のOBの人、悪いけども、この人達が、こういうことを言っても、多分、何も考えていないし、何を言っているのかって分からないと思うんですが、これが地球の激震ですね」

水島「はい」

用田「それがグローバリストの企みが表面化して、メディア総動員の欧米1極支配の押し付け、もっと言えば、彼らの我儘の押し付けと。だから彼らのものの考え方、道徳が不道徳になってしまって文明というものが壊れているんだというのが、このウクライナ戦争の大きな意義だろうと。

それから2023年になると欧米のウクライナ戦争の敗北は決定したんです。ザポリージャという所で、夏に決戦をしまして、あれでウクライナは完全に負けて勝つ要素は全く見られない」

水島「うん」

用田「勿論、今も戦っているのは凄いなという風に思いますけどね、だけど敗北は決定したと。尚且つ、2023年は中東での戦争が始まったということで、ウクライナでは、負けが決定しながら戦争を継続すると」

水島「うん」

用田「一体、狙いは何だと」

水島「うん」

用田「そうすると欧米の狙いというのはウクライナではなくて、ロシアの弱体化、分割じゃないかと。日本は、そういう分析が出来なければいけないですね。これが完全に思考停止になっている。中東で新たな戦争。今、石田さんとか宇山さんの方が詳しいんですけど、驚きなのはアメリカを振り回しているのはイスラエルだと」

水島「そうなんですよ」

用田「もっと言えばユダヤだと。イスラエルに振り回されるアメリカっていうのもねえ、やっぱり、そうなのかというのが見えたということが非常に大きい。それから今年になって、核戦争になってもウクライナ紛争を止めない欧米と。今、ウクライナで核戦争の危機がある訳ですね。大イスラエル構想も中イスラエル構想ぐらいで終わるかもしれませんが、イスラエルとイランも一触即発だろうけども、イランに手を出すと、これは、まあ、石田さんが一番、お詳しいんですけども多分、ロシアは黙っていないだろうと」

水島「うん」

用田「これこそ世界大戦の引き金を引くということは多分、トランプも解っているだろうと思いますけども。問題なのは、英米の力の限界を超えて、アジアを含む戦争を拡大していると、えっ、何でだと」

水島「うん」

用田「アメリカとイギリスの力の限界は、完全に超えているんですよ」

水島「うん」

用田「それを超えたのに、何故という疑問がわからないというのが不思議でならないんですけども、世界の大混乱からグレートリセットを画策する奴らは存在すると。私は、そういう風に思っています」

水島「うん」

用田「それをお伽噺だという方は、どうぞ、構わないけども、それは時代に、どんどん遅れていく訳であって、500年間の文明とか色んな歪みがぐう〜んと出ている時に、これは、色々な要素を否定してしまっただけでは、将来、見えないという風に思っていますね。それから、もう一つは、こういう流れの中で支配する者も支配される者も同罪だと。私も同罪です」

水島「うん」

用田「パンとサーカスとお金、唯物の快樂主義、そして、戦争と恐怖で今でも世界を支配できると思う奴らが居ると。何だと。一方、人間の飽くなき欲望、我々も含めて、暗黒世界に同調して助長すると。だから宗教とか伝統的文化とか道徳とか、こういうのが必要になって来る訳ですよ。そういう時代になっているんだという認識は、全く無いということですね。それが大きな流れで…」

水島「うん」

用田「これは以前、お見せしましたけども、世界は縦に2分割、西洋と世界。横に2分割、グローバリズムと反グローバリズムと。これが、ややこしいですね。一回、ここでお話したことがあると思いますけども、世界が複雑なのは、正に、こういう構造で、青が欧米で橙色が世界。ブリックス、プラス…」

水島「グローバルサウスですね」

用田「グローバルサウスだとか他の国々が敵対をしておる訳ですね。それで横断をして、グローバリストと反グローバリストが共存していると。やはり、ここが見えていなかったものが1年、2年前に言ったら、お前ら、馬鹿じゃないかと言われたのが今は、こんなことが平気で言えるんだ。ただグローバリストという名前自体がピッと来ているかどうかという問題はありますけどね」

水島「うん」

用田「言いたいことは、例えば、トランプは西洋の側に居て、プーチンとモディは反対側に居ますけども、しかし、これは反グローバリストと同族ですね」

水島「うん」

用田「だから、これから、そういう世界が国を超えて牛耳っていくと。グローバリストは、軍産複合体も含めて、習近平とかブラジルのルーラ・ダシルバ (Lula Da Silva) 大統領ですね。独裁者ですね。まあ、これらの枠組みっていうのは、縦と横に噛み合っているのが世界を理解する上で非常に大切だろうという風に思っています。

あと、少しです。グローバリストの正体、見たりと。本当は、ここでパリのオリンピックの画像をお見せしたかったんですが、著作権があるので見せられないということで、用田、お前

が金を払うのかと言われて、いや、払いませんっていうことでやめました、あの開会式と閉会式のあれを見たら、よく解ります。基本的にやっていることは悪魔ですよ」

シュラー「うん」

用田「それは米が牛耳られている、正にヨーロッパが無くなっているかもしれないというのは、欧米が無くなっているんですよ。EUというやつで試験、実験場になって、だから一言で言えば、国民の選挙で選ばれていない支配者達、EUが正にそうです。国を滅ぼし人格を破壊し、金と欲、そして暴力で世界を統治できると考える、陰に隠れた『卑怯者達』が酸欠の魚のように表に出て来た時代と。これを考えるだけでも相当、時間を食いましたが…」

水島「いやいや、どうも」

用田「正に酸欠のように出て来ている」

水島「うん」

用田「これが見えないのかという風に申し上げたい訳です。その中で軍事に少し入りますけれども、英米1極支配が、ずっと続いてたんですね。やろうとしていた」

水島「うん」

用田「しかし、それを乗り越えて色んなものが変わって来て、多極への後戻りしない変化。これ、もう後戻りしないんですよ。この前、お見せしたと思いますけども、BRICSという大きな塊。これは大体、ロシア、インド、中東、アフリカ、この辺りは弱いように見えて、非常に強い結束がここにあるだろうと。ロシアというものがあって中国があるんですけども、これ、異質ですけども中国は強制結婚させられた。それをさせたのはバイデン政権ですね。愚かな政策だと思えますけどね。日本にとっても愚かです。

そして、今度、アメリカではトランプが出て来ると。トランプとプーチンとは多分、親和性があるだろうと。民族、宗教、伝統、こういうやつを大切に、国家主権を大切に、それぞれ繁栄していこうという理念は、きっと合うんだろうなという風に思っていますけども、ここが、どう融合するか、その下に横軸にありますように、グローバリストが入って来て日本と欧州は食い潰されていると。特に日本は食い潰されているという状況だという風に思います」

水島「うん」

用田「先程、申し上げたトランプの目指す新世界秩序は、中立・孤立主義。信仰と家族を取り戻す伝統的なアメリカへの回帰。何も驚くことは無い。中立・孤立主義になるということがアメリカの伝統であって、その伝統に回帰して信仰と家族、これを大切に回帰をしていこうという訳ですから、日本がどうなるかというのは一目瞭然だと思えますね」

水島「うん」

用田「絶対、時代は変わる。プーチンの目指す新世界秩序も、親和性が非常に大きい。これが一緒になると、中国は、はじき出されると。だから我々は軍事的なことを考えると、中国をはじき出さなきゃいかんですよ。その為にはロシアというものと日本、アメリカが修復を図ることが世界の構造にとって、いい方向に向かうんだという風に思っています。

しかし尚も続く英米一極支配への未練、これは、この下に書いていますね。ケーガン、あのネオコンのあれですね、何ですか、女性の…」

水島「ヌーランドですか」

用田「ヌーランドの旦那ですね。ケーガンは12月に日本で講演しているんですよ」

水島「うん」

用田「アメリカは核戦争へのエスカレーションを心配し過ぎている。ウクライナでロシアを挑発し続けよ。核戦争にはならないからと。これが彼らのロジックですよ」

水島「うん」

用田「トランプに渡すぐらいだったら、核戦争になった方がいいというのを日本で言っている訳ですね。経済も軍事も今、日本が標的でグローバリストに最後の地ならしをされているという状況だということ、日本はよく考えた方がいいと思います」

水島「うん」

用田「二つあって、ウクライナ紛争というのは、英米とグローバリストの30年がかりのロシア分割、ハートランドの制覇、制圧計画」

水島「うん」

用田「だから30年かかってやってきたことを、早々に手放しはしない。しかし、また負けました。それに、もう一つあるのは、おまけについているのは日本とドイツの再隷属と収奪の完成というところに、日本は全く気が付いていない訳ですよ」

水島「うん」

用田「これはウクライナ分割。私がプーチンの手下だったら、こう考えるんだなあとって、これは4つの州の領土と言うやつは、絶対に取りますというところです。あとは、非武装の緩衝地帯は絶対に必要な訳ですよ」

水島「うん」

用田「これは、どっちかと言うと、このドニエプル川に沿った辺りで、ここは非武装にする。NATOなんか居るのはとんでもないと。ウクライナの残りの所はウクライナで結構だが、NATOは入れちゃ駄目と。NATOは入れちゃ駄目。そして非武装の緩衝地帯をつくる。そして領土という線をしっかり引くという形に、プーチンは譲らないと思うんですね」

水島「うん」

用田「トランプが、これを、どう采配をするか、1日では決着がつかない、ということだろうという風に思います」

水島「そうですね。トランプがNATOを入れることは言っていますね、あの問題ね」

用田「ウクライナに、ですか」

水島「はい。駐留させるってね」

用田「まあ、餌じゃないですかね」

水島「まあ、難しいでしょうけど。一応、言っていますね」

用田「だから駐留にも、こっちの方の残りの所にPKOとかそういうやつが多少入ることは、あるかもしれんねと。しかし、それはヨーロッパの軍隊かどうかっていうのはクエスチョンだなあと思います」

水島「そうですね」

用田「もしかしたら日本が行くかもしれないですね」

水島「(苦笑)」

用田「あらあ、たまらないですね」

水島「うん」

用田「軍隊でない限りどうにもならないですね。日本についてはディフェンス・プランニング・ガイダンス92年から繋がる日本の分断、孤立化、弱体化政策は、成果が、日本にとって今、表れている訳ですね」

水島「うん」

用田「最後に指揮権を取ってしまえと。実態上、指揮権を取られてしまう瀬戸際。だから、日本とアメリカは、韓国と違ってバイラテラル、並列ですから、その形は残るんですね。しかし形を形骸化させられるか、いざとなった時に日本人が自分の指揮権を取り戻してやるぞと決めた時に、日本の首相と統合司令官にアメリカを排除してでもやる勇気があるかどうか。ここに全てがかかっていると。永久に日本を普通の国にしないというのは、しっかり日本にかぶさっていると」

水島「うん」

用田「もう一つは、アメリカは尹大統領の戒厳令の失敗というのを知らないはずがない訳であって、これは日韓には核を持たせないというメッセージ。尹大統領は核容認。それから、その下の国防長官のキムさんですか」

水島「うん」

用田「あの人も核容認。それから退役した陸軍大將が『核には核を』という盛り上げをやっているんですね。発起人になっている。だから60%の韓国の国民、あとで、どの程度か、荒木先生にお伺いしたいんですけども、かなりの人達は、やっぱり独力で核を持つべきだと」

水島「核保有を支持していますね」

用田「支持している。というものは、韓国を潰して日本も潰すというやり方で、韓国は弱体化するか、韓半島は弱体化するけども、それは、どうぞ、トランプさん、やって下さいと。しかしトランプは、それを逆手にとって北朝鮮と何らかの条約を結んで、じゃあ、アメリカ軍は下がりましたかと」

水島「うん」

用田「こういうことでも劇的に変わっていきだろうなと」

水島「うん」

用田「日本も、そういう形になるだろうなという風に思っています。ちょっと長くなって、申し訳ございません。日本が今の様な世界の状況を、私の様な観点で認識しているかと言うと、残念ですけど防衛省も含めて認識はしていないと思いますね。それは私が威張って言う話ではなくて、色んなものを、あとでお話ししますけど、これが自衛隊のOBの文章かよというやつを見た時に、申し訳ないけども私は二度と自衛隊には戻らないと思いました」

水島「うん」

用田「OBですから戻れませんけども。OBの自衛隊にも戻れないと思っているんですけどね。しかし世界の変化が見えていない日米英。英米1極支配は終わったということが、解ってない訳ですね」

水島「うん」

用田「ここにあるように、NATOは負けたんですね。これから恐らく解体されていく可能性はあります。トランプはNATO関与を縮小していくっていう流れになっていくだろう。これは予想です。欧州は今度、アジアに関与して、どうのこうのと言っていますけども、欧州は中国と戦う気も無ければ力もない」

水島「うん」

用田「連携は無意味な訳ですよ。日本は今、無意味な連携を、一生懸命、誘われているのは何かと言うと、これはグローバリストの軍事部門の統括がNATOですよ。EUと同じように。だから、その軍事部門の統括をNATOにさせて、日本の指揮官に入れてしまうという流れの中で日本は動いて、国防というもののNATO化なんて平気で言っている総理大臣も居る訳ですから」

水島「うん」

用田「とんでもない悪さだという風に思いますね。最後、そういう流れの中で、プーチンはユーラシアの安堵の地固めを着々とやってNATOは弱体化して、あと、ちょっと一刺しで倒れてしまうと」

水島「うん」

用田「特にベラルーシと同盟じゃないけども同盟に近い条約を結んで、北朝鮮とも今、結んでいる訳ですね」

水島「うん」

用田「そしてイラン。だからイランに手を出すと、ロシアは絶対に黙っていないという状況ですけども、ロシアとイランとアゼルバイジャン、それからインドという南北のラインは生命線ですから、イランに手を出しては駄目よという世界だと。私は、ある意味、シリアは、捨てられたかもしれないけども、しかしイランは絶対に捨てない。だからユーラシアの地固めで、ユーラシアの壁が今、出来ているんだという認識が、日本にありますかと。

破れ傘のNATOと一緒にあって何が出来るんですかということが、スタートラインだとい

う風に思います」

水島「そうですね」

用田「以上です」

水島「はい。有難うございます。イランの問題で言うと、別のところの討論の中では、例えば、矢野さんなんかは、もう既に一応は持っている。ただ未だ応用できない、使えない。未だ使えるほどのものじゃないという話が出ていますね。やっぱり、その問題、最終的に、イランがどうなるかっていうことは、おっしゃるようにね。これでロシアと北朝鮮的な繋がりが出来ちゃうと、全く手が出せなくなりますから」

用田「ええ」

水島「これは大変なことになるっていうのと…」

用田「この前のカザフの会議で、イランとの協定を結ぶ予定だったらしいんですが」

水島「みたいですね」

用田「延期したらしいですね」

水島「はい」

用田「でも、それは政治的に賢いやり方だと思うんですが、しかし、それは、やはりイランとロシアが必ず手を結ぶと思いますね。南北回廊がありますから。私はそう思います」

水島「そうなんですよ。ひとつはね、シリアの問題は、皆さん、ご存じのように、カタールとか、まあ、そちらから、また説明があるか分からないけど、カタールからずっとシリア経由でトルコ。それからトルコ経由で、またヨーロッパ。パイプラインが出来ると、ロシアも相当締め上げられると。以前、ロシアが頑張ったのがシリアで、それがあったって言うんですけど、もう、そういう発想でやっていないかも分かんないっていうね、そのパイプラインとか、そこら辺の問題だけじゃない形で進んでいるのと、ウクライナで言うと、もう既に、先程、土地の地図を見せて戴きましたけど、西洋の報道の一部だったんです。ウクライナの小麦、食用油の田畑は6割ぐらいブラックロックが所有している。

地下資源の権利も殆ど持っている。だからウクライナをやるのは、トランプ大統領の言葉によれば復興なんて言っているけど、復興なんか出来るとしたら110年以上かかると、そういうことを含めて、そのお金が出る。何処からって言ったら日本というね。そういう構図が出来ているっていうのが…」

用田「地下資源も大半は東側にありますんでね」

水島「そうなんです、はい」

用田「だから、今、8割方、取っているんじゃないですか」

水島「そうですね、はい。というような感じが今、分析として出ました。この問題は、東アジアの方にも来ているんですけど、では、荒木さん、お願いします」

荒木「はい。今、用田閣下のお話からすると、かなりミクロな話になっちゃうんですが…」

水島「いやいや」

荒木「自分の場合は、特に拉致のことと朝鮮半島問題ということになるんですけども、まあ、韓国は、この間、例の戒厳令騒ぎで、一体、何の為にやったんだか、今でも、全然、よく分からないというのが正直なところですね。6時間で戒厳令を発令して6時間で止めちゃうという、恐らくギネスブックに載るような短い戒厳令」

一同「(笑)」

水島「そうでしたねえ」

荒木「世界中でも空前絶後の戒厳令だったと思うんですけど、あんなことだったら別にやらなくても良かったじゃないかと、誰でも思うことをやってしまったというのは、韓国の場合、大統領ってというのは選挙で選ばれる王様なので、しかも、あの人は検事出身だから、あまり人のいうことを聞いたりするのが得意ではない。与党とも喧嘩をしていた中で、奥さんの色んな疑惑やなんかに、野党の方がかなり噛みついていて、結局、行き場がなくなったのかなという感じはあります。

共産主義勢力が、というようなことを様々言っていて、それは決して間違いではないとは思いますが、いくらなんでも、やり方が稚拙だったのではないだろうかという風には思います。これから先、韓国はどうなるのか。野党の方も、別に評判がいい訳じゃないんですね」

水島「そうですね」

荒木「イ・ジェミョン（李在明）という野党の党首も、あの人も山程、疑惑を抱えていて、いつ捕まるか分からない」

水島「そうですね、訴えられていますね」

荒木「だから国民の方も、まあ、別にイ・ジェミョン（李在明）でいいからということではないけれども、しかし、流れから言えば、もし、これで大統領選挙をやれば、通常で考えれば、また政権交代という可能性が高いのではないかと思います。ただ、選挙をやる前に、イ・ジェミョン（李在明）が捕まってしまうということもあり得るので、捕まったら今度の選挙に出られなくなるから、その時に、今の野党の中に代わりで出られる人材が居るかって言うと、あまり居ない」

水島「うん」

荒木「もう一人居た曹国（チョグク）と言う元法務大臣が居ましたが、この人は先に捕まってしまうと、もう選挙に出られなくなっていますね」

水島「そうですね」

荒木「だから、そういう意味で言うと、もう与党も野党も一体、何処へ行くか全く訳が分からないという状態なんですね。一方で正に、この1年ということでは、去年の暮に、北朝鮮は、もう統一をしないという方針に変えて…」

水島「しましたね」

荒木「今迄、全く使わなかった大韓民国という言葉を使うようになったと」

水島「うん」

荒木「これは明らかに呑み込まれる事への恐怖。南に呑み込まれるという恐怖感の表れで、それを何とかして止めたいということだったんだろうと思います。で、北朝鮮には、韓流のコンテンツが蔓延していて、夏、7月ですか大水害が起きて、未だに真面に復旧出来ていないですけど、中国国境のところに視察に行った金正恩が演説やっている中で、北で使わない言い回し、南の言葉を使っちゃったという話がありまして、だから金正恩も韓流ドラマを観ているから…」

一同「(笑)」

荒木「その言葉が出てしまったというのがありまして、もう、そういう状態ですね。捕まれば重罪で、最近でも中学生が韓流のコンテンツを観て公開処刑になったとか、そんな話がありましたけども、そういうことをやっている連中だって恐らく観ているということで、この点はどうしようもなくなっていると。ただ北朝鮮っていうのは物凄く隔絶された社会なので、ピョンヤン、そして、また、その中の特権層っていうことになっちゃうと、別の世界と本当にカーストが違う、平壤には普通の人は住めないという状態なので、上に居る連中というのは、とにかく自分の生活だけ守ればいいと。

それは国全体がどうこうなんていうことは全く考える必要も無いというような状態で、だから、やっぱり、あの体制が崩れないということではないだろうか。あの体制が崩れない理由というのも国際的な理由も含めて色々あると思うんですけども、その国内的には、そういう部分があるんだろうと思います。

ただ、今迄は、とにかく統一をするということで全てのことをやってきた。国民に、どんな犠牲を払わせても、とにかく一応、統一をすると。南朝鮮というのは、要は、アメリカ帝国主義の植民地で、だから、虐げられている人民をここから解放して朝鮮民主主義人民共和国として統一をするという方向が、一応、あった訳ですね。

まあ、と言ったって実際には朝鮮戦争で休戦になった以降、そんなことが出来る可能性は、無かったんですけども、でも、とにかく方向性だけでやって来た」と

水島「うん」

荒木「ということは、それでやってきた国の屋台骨を全部、否定してしまったことになるので、これは恐らく金正恩という人は別に何の勉強もしている人でもないの、もう、これはヤバいと思ったということで、そういう風にしてしまったんでしょけども、必ず何処かで、それによる失敗というのは表に必ず出てくるはずだと、まあ、既に出ているんだと思うんですけども、そうなると、その状態の北朝鮮と韓国はどういう風になるかと考えると、だから、誰も中心になる人間が居ない状態が朝鮮半島に起こり得るということなんだろうと思います。

これは、ある意味で言うと、旧大韓帝国末期みたいな、周りの何処の国につくか判らない。ロシアについたり中国についたり日本についたりというような状態の中で、だから、真面に国のことを考えている人間は全部、すり潰されてしまっていくという状況になり兼ねないのかなという感じがしております」

水島「なるほどね」

荒木「但し、そうであれば、我々に手を出せる余地は大きくなるのではないかとということで、私がやっている言葉で言えば、拉致ということになるんですけども、あの体制、まあ、今、林官房長官始めとして、まあ、林さんが拉致問題担当大臣兼任なので、あらゆる場で、色々、国会議員の中にも含めて言っているんですが、ともかく日本政府としてのメッセージを出して下さいと。そのメッセージというのは、今、何か北朝鮮の金正恩と会談やるという話ばかりしているけども、そうじゃなくていいから、ともかく北朝鮮のどんな勢力でも、どんな人でも構わないので、日本人の拉致被害者救出に協力してくれたら日本政府として支援をします。或いは、保護します。つまり金を出しますし、亡命も受け入れますということを政府として、何とかメッセージを出して貰いたいということをおっしゃいます。

まあ、完全では無いんですけども、林さんは、ある程度、そういうようなニュアンスのメッセージを出してくれたりしています。それによって、ともかく今のあの体制の中で、このままでもいいと思っている人間というのは、恐らく殆ど居ないだろうと。いつ潰れるかわからないけども、潰れるまでは自分の生活を今の状態で維持しなきゃいけないと思っていた訳ですが、それでも大使とか公使とか、そういうレベルの人でも亡命が相次いでいるという状況から考えると、そこら辺から何処かで穴が開く可能性があるのではないだろうか。

穴が開いた時に、我々としては、それを全部、取り返しに行くとか、そういうことは自分達の能力では出来ないんですけども、それでも何処かに突破口を開けることが出来れば、そこで一人でも二人でも帰って来ることが出来るというようなことが今後、実現するのであれば、それは世論を大きく変えることになり、ある意味、あの22年前の時のような盛り上がり、そして今度は、その時と国際情勢も違いますから、日本も独自で動かざるを得ないという風になってくるのではないだろうかという感じがしています。

それも、あくまで希望的観測に過ぎないんですけども、やっていけば当然、その様々な反発が起きる訳ですね。特に北東アジアっていうのは、日米、中露と南北朝鮮と6か国ある訳で、バイでやるのであれば返って話は簡単で、北朝鮮と日本だけでやるんだったら、話は簡単ですけども、中国もロシアも、みんな、絡んできちゃう。

日本が北朝鮮と直接やろうと思って動けば、今度は韓国が邪魔するというようなことがあって、本当に白と黒で碁石を打っている時に横から勝手に緑色の碁石とか赤い碁石とか、どんどん置かれちゃって、もう何が何だか分からなくなるというような状況だと思えます。だから、そういう意味で日本は何処まで我を通して出来るかということだと思っただけですね。

この点は、ちょっと皆さんと意見が違うかもしれないんですけども、安倍さんの時にやって来た拉致問題は基本的に、みんな、失敗だった訳ですね。10年前、ストックホルム合意というのがありまして、ストックホルム合意っていうのは元々民主党政権の時に始めたやつだったんですよね。それが、一旦、民主党の政権が替わって、北もミサイルを撃って駄目になって、それが、また同じ形で復活をしてやっていたんですけども、結局、上手くいかなかった。

あれが失敗したことによって、安倍さんは本当に拉致問題のやる気を無くしてしまったということであって、しかし、そういうレジェンドみたいになったものはそのまま続いてしまって、結局、何も出来ずに終わってしまったと。だから、そういう意味で言うと、石破政権というのは安倍晋三の負の遺産からは、私は自由な政権だと思えますので、要は、誰がやっても構わないので、結果さえ出してくれればいい訳で、もう一人でも二人でも取り返すということが大事だと思えますので、我々としては、ともかく、そこに向けて来年こそ、だから、そう言いながら今年も全く何も出来ずに終わってしまい、未だに特定失踪者のご家族も随分、

亡くなり、うちの調査会の役員でも中国、四国で5人居た役員の内、今年は4人も死んでしまいましたので、そういう意味では我々自身が本当に崖っぷちですけども、とにかく来年は何とか突破口をつくらなきゃいけないと思います。私は、その可能性は充分にあるという風に思っております」

水島「うん。まあ、それは、私とは、ちょっと色々微妙に政権の姿勢に対して、私はちょっと違う意見を持っているんだけど、実際に本気だと思いますか。私は、もう20年、拉致問題アワーをやってきたし、荒木さんにも色々ご意見を伺ってきたけど、今の状況で言うと、政府は、みんな、家族も向こうにさらわれている人達も、亡くなるのを待っているみたいなね、もう今年こそは命懸けで全身全霊でとかね、最近、申し訳ないけど、私は大会に行っていないですよ。国会議員が来て、命懸けで救い出すとか言ってね、毎年、同じことばかり言っているんで（失笑）、荒木さんが言っている様に、もう脱力してしまうという気があるんで、本当は見殺しにすることを前提にしているんじゃないかと、リアルな形でね。

昔、宮崎正弘さんが言っていたんですけど、1兆円、出してね、それから、まあ、これは、田中均とかね、昔、言っていたことらしいけど、1兆円と核技術、実験場の提供とかいうところで、そういう形でどんどん動いちゃったらどうだと。ただ、それを邪魔するのは恐らくアメリカだろうというね。そういうトラブルを北朝鮮とつくっておかなきゃいけない。ふと思うと、あの体制が独裁体制で国民を飢え死にさせたり弾圧したり、人殺しをやったりね、酷い政権だと思うんだけど、だけど、それは、もう関係ない形、と言ったら問題だけど、とにかく我々は拉致被害者も特定失踪者と言われる拉致被害者もね、やっぱり全員、取り戻すっていうのが、まず、先にやるべきことじゃないかっていう気が、ずうっとしているんですね。

このまま行ったら荒木さんもそうだし、我々もそうだけど、本当に、みんな、死んじゃってね、家族会の人達も、みんな、まあ、若い人は横田さんの息子さんとかやっているけども、そういう状態になるんじゃないかっていう気がしてねえ、どうも信じられないと言うかね、うん」

荒木「まあ、だから本気だっていうのは、どういうことであるかっていう問題はあるんですけども、本当の意味での命懸けであったかっていうと、それは、安倍さんであろうが誰であろうが、歴史上、これまで一人もそんな人は居なかったと思いますよ」

水島「うん。なるほど…」

荒木「ええ」

水島「だから、おっしゃるところで、意外と私も共感するところがあるのは、実は、それは、やる真似をしておけて言われていたんじゃないかという気があるんです。北朝鮮とは常に緊張関係があった方がいいと。まあ、私から言うと、ネオコンの勢力にとっては、アメリカに頼る状態が創り出されるから、拉致問題を解決しちゃうと、北朝鮮の体制は、ともかくね、あまり核の問題だと言ってはいるけれども、それも仲良くなってしまうと関係ないみたいなね、それから韓国の場合も竹島っていうのを必ずつくって、日本と韓国がね、まあ、慰安婦問題もあったけども、どうも朝鮮半島と日本との間にトラブルをつくっておくっていうのがね、アメリカのGHQの流れだったんじゃないかっていう気もあってね。

おっしゃるように、皆さんに、ちょっとセンチメンタルなことを言うと、本当に横田さんのご夫妻、奥様は未だご存命で頑張っておられるけど、もう、このスタジオに来られて、拉致

問題アワーに来ていた家族の人達が本当にどんどん亡くなっているんですね。だから本当に私もね、さっき言った様に忸怩たる思いって、私達のせいなんでね。国民のせいでもあるというか、本当に、丁度、今日、ご出演戴いたので、拉致問題のことを、もう一回、皆さんに思い出して戴きたいっていうかね…」

荒木「よく昔、言われていたのは、日本社会党とか、或いは、自民党の中であれば、金丸信とか野中広務とか、そういう親朝派…」

水島「ああ、ありましたね」

荒木「まあ、力があるからって言うことは言われて来たんですけども、じゃあ、日本社会党は、今、もう殆ど影も形も無くなって…」

水島「無いですねえ」

荒木「それから野中広務も金丸信も、みんな、死んでしまった。だから、もう国会の中で、今、自分は北朝鮮に近いって言うことを自慢する人間なんて居ないですよ」

水島「居ないですね、そうですね（苦笑）」

荒木「ええ。でも動かない訳ですよ。だから、それは一体、何なのかって言うと、そういう左翼とか、そういうことは勿論、あったと思うんですけど、それは、あくまで、上に乗っかっている部分であって、もっと基礎に、まあ、それは、ある意味で言うと戦後体制ということなんでしょうけど、それがあって、その中で、今、社長がおっしゃったように動かさない方がいいと。これは、別にアメリカだけという話じゃなくて、日本の中でも、やっぱり、アメリカの属国的な日本という方が自分の立場がいいという人は沢山、居た訳で…」

水島「はい、居ますね」

荒木「まあ、それは利用した日本人の方が悪いと、私は思うんですけども、そういう中で、ともかく独り立ちしないという形の方が良かった。拉致問題って正面から見てしまえば明らかに安全保障の問題である訳ですから、そうすると、じゃあ、やられたことに対して、どういう風にやり返すかとか、そういうことを考えなきゃいけない。実際、これから色んな事が明らかになってきたら、間違いなく拉致をされている途中で殺害されたとか、或いは向こうで殺された人などが出て来るに決まっている訳ですよ」

水島「そうですね」

荒木「そうした人は一体、どうするのかと。だから何人か帰って来たら、これで全部です、おめでとうございますって言う訳にいかないの…」

水島「そうなんですよ」

荒木「でも、そういうことを、ある意味、何処かで覚悟というものを持たなきゃいけないし、そういう現実と直面をすることになると思うんですけども、それが場合によっては、私は日本を変えることの一つになるんじゃないかと。それは鶏と卵で言えば、取り返すことが先ですけどね。その結果で、何かやっぱり違うものが出て来るんじゃないかなという感じはしています」

水島「なるほどね。はい。そういう意味では、本当に最も良心的な、この拉致問題にずっと

何十年も関わっておられた方の実感と分析だと思います。有難うございます」

荒木「(礼)」

水島「はい。では、シュラーさん、お願いします」

シュラー「はい。今年はアメリカの選挙で、トランプさんも大勝ちですね」

水島「はい」

シュラー「急に、こういう左翼の文化。例えばLGBTを励ますとか、女性を上にあげますとか、もう白人男性を無くすとか下にするとかが突然、無くなりました。トランプが当選してからね。そういう話も今、あまり聞かないんですよ。結構、左翼が、そういう民主党が、やっぱりハリスも勝てるんじゃないかなと信じて言っているみたいな感じで、ほんとにね、日本のマスコミも、ずうっとハリスが強いと色々出ていましたけど…」

水島「言っていましたね」

シュラー「正直言って、全然。トランプもね、これからアメリカの問題に集中したいと思えますよ。それは、いい意味の問題で、例えば、ウクライナについて、この前、ゼレンスキーと会いました。フランスへ行って、ノートルダム大聖堂の儀式があったんですけど、今、造り直しをして、どういうことを話したかって、よく知らないけど、ゼレンスキーが凄く怒っているみたいな感じで、でもアメリカは、もう出来ないんですよ。アメリカには出来ない。

アメリカの武器も出来ないし、アメリカが本当に出来ないと、もう管理の中でも、これからアジアの方に向きたいとか中国の方を見て。これもアメリカも負けるんじゃないかなと思えますけれど、ヨーロッパのリーダー達もパニックしている。こういうPeace Keepingとか、そういうような部隊を出すとか、この前、フランスのマクロンがポーランドに行ってドナルド・トウスクに会ってきて、まあ、ドナルド・トウスクは、やっぱり10万人、最低でもかかるよ。10万人だったら相当な数だから、ポーランドも参加しません。ウクライナを支持しますよ。どういう支持かは言っていないけれど、Peace Keepingの部隊は出せないとかね」

水島「うん」

シュラー「正直言って、英国の軍隊とかドイツの軍隊も本当にボロイから出来る訳がない。出来る訳ない。それでヨーロッパ人もパニックしている。そういう長距離ミサイル、アメリカ人、古いの、2014年の、ロシアの中で打っている。エイタクムスとか何かね、代わりにドニプロの方でユジマッシュ工場には、ロシアがオレシュニクミサイルを出して、それも、みんな、パニックしている。そういう技術は、西洋の方には無いんですよ。

オーケー、トランプが一番、集中したいのは、私の意見は不法移民。不法移民は、みんな、強制送還。これ、1千万人。1千万人は相当の数で、もう抵抗も出ていますよ。コロラド州のデンバー市の市長が、デンバーの警察は不法移民を守ります。アリゾナ州のツーソン市も同じことを言っている。不法移民を守ります。シカゴ市長は、それに近い話で、はっきりそう言わないけれど、トランプの計画は悪と言っていますけれど、しかし、ニューヨーク・シティ市長も民主党から共和党になろうと考えているから、ニューヨーク市も、もう破産ですよ。不法移民にお金ばかり出していることは、もう出来ない。食事を出したら、前は1日3食とかホテルとか色々出しているんですよ。食いは、もう出来ない。今、食事を出していないね。

私の意見ですが、やっぱり軍隊を使わないと出来ない。今のアメリカ軍が、ずうっとオバマ大統領からの政策で、本当に最低最悪になっていますよ。もうベトナム戦争の終わりと同じぐらい。私もベトナム戦争時代の兵隊でした。ベトナムへは行ってない。ベトナムに行っていないけど、あと2歳年が上だったら、ベトナムに行ったでしょう。でも行ってないけれど、その時のアメリカ軍が本当に酷かった。

よく兵士が士官を殺したとか、全然、才能も無かったからね、ベトナム戦争が、色々損害になって、アメリカ軍を創り直すので15年、かかりました。本当に15年もかかりました。それを一生懸命、やっていた。今もベトナム戦争の時と同じですよ。アメリカ軍、もう結構、酷い。ずうっとLGBTの政策とかマイノリティの政策とか、何か色々、人の才能より、顔の色の方が大切とか。生まれたジェンダー、セックスの方が大切。いやあ、いや、そういう才能がある人が昇進するのには時間がかかります。

もう一つ、アメリカが移民を入れないように、やっぱりメキシコ国境で、連邦政府軍を使うとか本当に思っている。あと麻薬を止める為に。特にフェンタニルが国境を渡っていますからね。それも麻薬を使う。もう一つ、やっぱり海軍が封鎖。今、やっていますよ。潜水艦でも使っているよ。この麻薬集団。こういう半分、殆ど沈んでいる潜水艦みたいな感じ、麻薬ばかり入っていると。アメリカの海軍とか色々探しているけど、これ、もっと使うし、あと、特殊部隊。特殊部隊を利用するって。メキシコの中に入って来ると、そういうカルテル。カルテルは英語でDrug Cartelという麻薬集団。麻薬販売集団のリーダー達を殺す、やっちゃいますとか言っている。実は僕のお爺さんがやりました。1916年。パンチョビリヤという犯罪集団のリーダーがメキシコに居て、アメリカの国境を渡って来てアメリカの町の銀行強盗とか色々やって、アメリカの陸軍で、僕のお爺さんは陸軍騎兵隊の大尉だった。メキシコに入って行って、それを追いかけたんだけど上手くいってないんですよ。

メキシコ人が結構、嫌なんですけど、しかしメキシコ大統領は二つの集団をメキシコの中で止めたんですよ。もう帰したんですよ。やっぱりトランプが結構、関税をするとか脅かししているから、トランプ大統領になる前に一応、影響も出ています。影響が出ていますけど。あとカリフォルニア州知事は結構、抵抗すると思いますよ。もう、今、言っていますよ」

水島「うん」

シュラー「トランプのこれから作る法律に戦う予算もつくっています。取り敢えず2500万ドルを一応、用意している」

水島「うん」

シュラー「だから、これからアメリカの国内、まあ、内戦までは行かない。内戦までいかないけど困難。私が英語でつくっている言葉でAmerican Troublesとか、こういう問題の時代に向かうんでしょう。トランプは結構、精一杯だから、本当に遠い日本の中で、中国に対しての何かを救えるかどうか、台湾有事を救えるかどうか。そんなにアメリカには、力が無いでしょう。何処の戦争に集中するのか、一番は、やっぱり中近東。中近東とか、それも石田さんが専門ですけど、だから種類もありました。種類もありましたけれど、成功しているんじゃないくて、種類がめちゃくちゃになっていますよ。

ああ、今、もう一つ不思議な事があるんですよ。最近、東海岸のワシントンからニューヨークぐらい迄、ニュージャージーまで、無人飛行機、ドローン、不思議な無人飛行機、ドローンとか何かね、色々飛んでいるんですよ。まあ一つの噂があるんですよ。NESTというこ

とがあるんですよ。N、E、S、T。これが Nuclear Emergency Support Team、NEST。これは何ですか。アメリカ、例えばテロリスト集団が何処か手作りの核爆弾、何かね、ダーティボムもいっぱいあって、核物がいっぱいあって。探しているんじゃないかなって話もある」

水島「なるほどね」

シュラー「でも、これは本当に未だバイデン政権の誰かが、こういう事件をつくってロシアがやりましたとか何か、じゃあ、ロシアにクレムリンに指示しないと、とかの可能性はある。ロシアは絶対にやる訳ない。そういうのは本当にやる訳がない。でもそういう不思議な動きがあると、アメリカ政府が、いや、分かりません、分かりませんとか言っている。しかし、トランプさんは記者会見に出て、アメリカ政府は絶対に知っている。私は知っている」

水島「うん」

シュラー「何々言わない。でもアメリカ政府が、明らかに国民に言った方がいい」

水島「うん」

シュラー「だからシリアの戦争が突然、出て、これが一つのバイデン政権が終わる前の、一つのサプライズ」

水島「うん」

シュラー「他にサプライズも出る可能性もある。やはり1月21日、トランプ大統領が実際に大統領になるまで緊張していますね。トランプ大統領になってからでも、アメリカの中には抵抗もある。よく日本でね、トランプは大統領になりましたから、アメリカ、これから復活、いや、復活しない。昔のアメリカに戻れない。これから色々トラブルあるから、未だ分裂の可能性がありますから、勿論、ハリスが大統領になった時よりトランプが良いけれど、まだまだアメリカは、これから大変な事ですよ。そういうことです」

水島「そのご指摘は、非常に大事ですね」

シュラー「うん」

水島「何か、もうトランプになると意外と上手く行きそうだっていう論調が、結構、多いんですけどね」

シュラー「うん」

水島「恐らくトラブルは凄くありますよね」

シュラー「あります」

水島「それと、もう一つは、結構、我々なんか取り挙げているミヤシャイマーという評論家なんかは、アメリカはね、もう中国包囲網は無理だと。はっきり言っちゃったっていうかね」

シュラー「うん、うん」

水島「ミヤシャイマーは今迄、地政学から言っても、そうじゃなかったですからね。まあ、そういう流れの中で、今度、ピーター・ナバロが復活しましたよね」

シュラー「うん」

水島「トランプ政権の中に、また入るだろうと言われている。そういう意味では、9.11のようなものも、ばらすとかいう話もあるんですよね。その調査結果の文書。或いはロバート・ケネディ・ジュニアが、ジョンF. ケネディの暗殺事件、もう大分、先の公開予定ですが、先にやるかも分からないとかね。何処までやるか本当に見えない、みんな、こうやって脅かしながら、やっているのかも分かりませんがね」

シュラー「うんうん」

水島「本当に、そういう意味では、ついていくのが大変ですよ」

シュラー「ああ、脅かしがありました」

水島「ん？」

シュラー「11月に、トランプの内閣に入る9人に、爆弾、脅かしとか、そういうのがありました」

水島「そうですね」

シュラー「9人」

水島「そうですねえ」

シュラー「ね」

水島「実際、トランプ大統領も2回、最低3回だっていう話もあるけど、攻撃を受けている訳ですからねえ」

シュラー「はい」

水島「そういう意味では、こういったものが、ずっと続く可能性も凄くあると、どういう時でも対応しなきゃいけないんですけども、日本の場合、殆ど、今、チャンネル桜の番組で取り上げたんですけど、皆さんに注目しておいて貰いたいのは、今のバイデン政権の言う事を、日本は100%、聞いてきた政策ですから。そうすると、このまま予算案を通してやってくと、石破内閣は、反トランプ、反米政権になってしまう可能性があるんで、そういうこともあります。

それと、もう一つ、これも言っておかなきゃいけないのは、外務大臣が少なくともアメリカの司法省が、こいつは犯罪人だって言っているのに、今度、中国へ行って、アメリカの国務長官より先に中国の外務大臣と会談をするっていうね、この非常識というかね…」

シュラー「うん」

水島「これ、信じられない。それで首相も、私は岩屋さんを、私は信じていますってね。信じるだけでいいんかいつていうのもあるんだけど、本当にちょっとねえ、大丈夫かなっていう気がしますねえ、今」

用田「ブラジルの大統領が3月に国賓で来ると」

水島「ほお」

用田「そんなのランプにとっては、お前、やるのかと」

水島「(笑) いや、だからね、どうして、そういう場違いなこととか…」

用田「イーロン・マスクの敵ですからね」

水島「そうですよ」

シュラー「うん」

水島「だから、態々、神経を逆撫でする様なことをやるのかという気がしているんだけど、多分、解っていないんじゃないかっていう気がするところがあるんですけど、また、皆さんの意見を聞いてみたいと思います。じゃあ、富岡さん、お願いします」

富岡「はい。最初に社長が正に世界の近代史っていうか、近代文明の大きな激動、転換期で、さっき用田閣下がずっと説明されて、全くその通りだと思うんですね。今年、亡くなった西尾幹二先生が『西洋と日本の歴史500年』っていう遺著を出されて、正に、この500年のスパンで今、世界は変わっている。この500年の様々な問題が色々な形で出ている」

水島「うん」

富岡「それを何かと一言で言えば、やっぱりヨーロッパ。中世まであった一つの価値観。これは、例えば西洋に於けるキリスト教なり、イスラム教なり、そういう宗教的価値観があった訳ですね。中世が終わり、正に近代を迎えていく」

水島「はい」

富岡「ですから、そうなった時に何が起こったかって言うと、人間が神の位置に行く。この一番の象徴が、私はフランス革命だと思っているんですね。自由、平等、博愛。人権」

水島「うんうん」

富岡「これが至上の価値になる。フランス革命の時にロベスピエールと画家のダビ、ジャコバン派ですけれども、彼らがカトリック教会、その超越的な価値を批判したあとに、じゃあ、その人間、国民が何を拠り所にしようかっていう時に、彼らが演出したのが最高存在の祭典というね、妙な柱を造って、人間理性が最高存在だって言って、まあ、偶像礼拝ですね。お祭をやった訳です。今年のパリ・オリンピックは、その茶番劇を、もう一回、繰り返した」

水島「うん」

富岡「つまり自由、平等、博愛。これで何とかなるだろうと。何とかならない。ヨーロッパは、もう死んでいるんですね」

水島「うん」

富岡「ヨーロッパの文化は、もう完全に崩壊している。移民もそうだし、そういうニヒリズムですよ」

水島「うん」

富岡「その時、もう一回、正に悪魔だって閣下がおっしゃったけれども、あのパリのオリンピックの祭典は、そうだったと思うんですよ。まあ、茶番です」

用田「(頷く)」

水島「うん」

富岡「だから、そういうね、やっぱり、この大きな500年のヨーロッパで言えばデカルト、そのあと出て来たルソーとかヴァオルテールとか、そういった人達が出て来て、人間が最高なんだ、人間が中心なんだ、世界の中心になったって。私は、ここが今のAIも含めて行き着くところまで行ってしまった」

水島「うん」

富岡「ハラリ (Yuval Noah Harari) っていう哲学者が居ますけれども、彼が、『ホモ・デウス』って本を書いています、人間がデウス、神になるんだ。そして、この世界が今の様な混乱になってくる。だから、もう一度、このヒューマニズムっていうか、もう人間とは何か、その人間が全て理性で出来るのかっていうね、やはり、ここを500年来の深い反省っていうか、やらなきゃいけない。だから恐らくイスラム的な価値が今後、出て来るっていうのが、このヨーロッパ500年の人間中心主義に対する一つの、まあ、様々な形での批判として、イスラム的な価値が出て来る」

水島「うん」

富岡「勿論、イスラムも、ある意味の近代化、ある意味の非宗教化はあるけれども、やはり、そういう価値観が恐らく出て来るだろう。そういう意味では、正に世界の大きな変動ですね」

水島「そうですね」

富岡「私は、これが今、起こりつつあるんだという風に思います」

水島「確かに。うん」

富岡「丁度、西尾幹二先生が1992年に『全体主義の呪縛』っていう本を出されて、まあ、冷戦が終わって92年、91年の12月にソビエトが崩壊した。そのあとに、西尾先生が旧東ヨーロッパへ行って色々取材して来た。つまり、それまでの全体主義、これはスターリニズムとかナチズムとかファシズムとかあった訳ですね。そして、あの冷戦の時代があった。

あの本の最後が素晴らしい表現だと思うんですけども、これから来る後期全体主義っていうのは、今迄のように独裁者の一人の力で全体を統率する、暴力と、そういう政治による全体主義じゃなくて、例えば自由という言葉、人権という言葉、場合によっては環境っていうワードで、それに反対する人達の言論が全て掣肘(せいちゆう)される、抑圧される、そういう価値観、そういう新しい全体主義が来るだろうと、もう30年前に言っているんですね」

水島「うん」

富岡「今、正にリベラル全体主義、リベラル・ファシズムですよ。これが今、世界を覆って来ているっていう…」

水島「そうですね」

富岡「西尾先生が本当に30年前に予言されたのが、今、そのまま世界を覆い尽くしているというね。だからジェンダー、LGBT、それに反対したら、お前は差別だ、うん、人権。」

何か言ったら、お前は差別だ。アメリカは酷いですよ。だから、やっぱり、そういう日本は、そのまま、それを、アメリカそのままアメリカニズムで、はいって同じことをやっているって、このねえ、後期全体主義が来ていると」

水島「そうなんですね」

富岡「そういう意味では、この自由とか平等とか人権とかっていう、この概念自体を本当に、もう一度、深く考え直していくっていうね」

水島「うん。そうですね」

富岡「やはり、そういう人間の考え方の限界って言いますか、そういうことも併せて考えていく、今、正に、そういう時に入っているんだと」

水島「そうですね」

富岡「それが具体的に正にグローバルサウス、アメリカ、或いは中東と世界の問題っていうのに全部、クロスしているんだなあっていう風に思いますね」

水島「そうですね」

富岡「う～ん」

水島「ほんとに」

富岡「それから、もう一点、私の評論の師匠だった西部邁先生が亡くなって、間もなく7年近くになるんですけど」

水島「うん、そうですね」

富岡「西部先生が、よく言われていて、僕は何度か、よく思い出すことがあるんですけど、西部先生が北海道から出て来て東大に入って、最初、日本共産党に入るんですよ。そのあと全学連の運動をやりますけど。その学生時代に、和歌山の部落の子供達を教えに行ったんですよ、日教組とか、そういう教育的なもので。部落の子供達に、学生として教えて接して、それで、帰る時にアイスクャンデーを御馳走しようとして買って来て渡したら、その子供達が『僕達は乞食じゃない』って言ったって」

水島「うん」

シュラー「うん」

富岡「僕ねえ、昭和二十何年の時代だったと思いますけど、今の日本人は、何でもくれくれ、103万円。まあ、いいですよ、そういう議論は。でもねえ、戦後の80年、日本人が何でもくれくれっていう国民になっちゃったっていう、とにかく、くれくれっていう、それは、減税も必要だし、雇用も必要だけれども、103万円。これは何だろう、僕はね、西部先生が、あの時、いや、その時はビックリしたよって言っていた」

水島「うん」

富岡「その子供達が『僕達は乞食じゃない』って。やはり日本人が、そういうところにあっただんだと思いますね。これが本当に無くなっちゃったっていう。それは自分も含めて、そういうことを感じますね」

水島「うん」

富岡「だから、もう一回、日本人の魂は何かっていう問題は、そこから、さっきおっしゃっていた拉致問題も、日本人が侵略されて同じ同胞が連れて行かれたっていう、そのことのね、本当にどれだけ大変な酷い事なのかっていう、これもねえ、戦後の日本人の魂が本当に腐っちゃったと」

水島「思いますねえ」

富岡「うん」

水島「主権意識が無いからっていう言い方もあるけど」

富岡「うん、そう」

水島「確かに、そうだけでも、同時に、こんなことを仲間がやられても黙っているのかっていうね」

富岡「うん」

水島「この素朴な意識が大事だと思うんですね」

富岡「そうですね」

水島「丁度、この間、番組でも紹介したんだけど、先日、対話集会みたいなのがあったんですけど、そこでのプーチンの演説で『アメリカは自らを地上に於ける神の代表者と見なしているが、彼ら自身は神を信じていない』っていうね」

富岡「うん。そうですね」

水島「こういう言い方をしている」

富岡「そうですよ」

シュラー「うん」

水島「つまり、プーチンの出しているのは勿論、プーチンのやり方とか色々あるけれども、彼らの拠り所、ドゥーギンもそうですけど、やっぱりロシア正教の影響が凄く強い」

富岡「そうですね」

水島「反グローバリズムとグローバリズムっていう対抗軸があるけど、同時に、もう一つは、心の問題とか、さっき中世の問題をおっしゃっていたけど、ここの問題はあると思いますね」

富岡「ありますね」

水島「もう一回、こういうものを取り戻さないと駄目だと」

富岡「うん」

水島「人間は自由、平等、博愛の理念だけでは、幸せになれないっていうね」

富岡「うんうん」

水島「もうロックとかホブズの社会契約論的な国民国家論も、もう破綻したっていうね」

富岡「うん」

水島「聞いていて思ったのは、ウクライナが一番、そうだった。つまりウクライナは自由の為に戦っているって、嘘ばかり言っていた訳ですね」

富岡「うんうん」

水島「そういう状態が、さっき、用田さんがおっしゃったように、ウクライナ戦争の本質が、日本のメディアも何も、みんな、含めて駄目だったっていうね」

富岡「そうですね」

水島「これが出たなあというね」

富岡「だからロシアがソ連時代にね、ソルジェニーツィンね、スターリン体制を告発して、亡命した彼がアメリカに行って絶望しましたよね」

水島「そうですね」

富岡「西側の自由な社会が、いかに酷いかっていうことをね」

水島「そう。私は、それで思い出して、その通りなんだよ。今、思い出したのは、ルバング島に居た小野田少尉」

富岡「はいはい、はい」

水島「あの方が戻って来てね、絶望したんですよ」

富岡「ああ、そうですね」

水島「つまり、自分は大日本帝国に帰って来たつもりだったのに戻って見たら、腐敗堕落した現代の日本でしょ。戦後の日本」

富岡「うん」

水島「だから国から貰った保証金みたいなお金を全部、靖国神社に寄付してブラジルに渡っちゃったんですよ。また戻って来られましたけどね」

富岡「うん」

水島「それでチャンネル桜にも出演して戴きましたけど、やっぱり違う、おっしゃるようになってますよね。はい。というようなことで、実は、我々も今、ここを問われているっていうことが出て来たと思いますけど。では、石田さん、お願いします」

石田「はい」

水島「はい」

石田「今、富岡先生がおっしゃられた、くれくれ体質っていうのは、やっぱり現代人は企業とか国家に依存しちゃっていると思うんですね」

一同「うん」

石田「それって自民党の思う壺ですよ。ということはディープステートの思う壺ですよ」

水島「はい」

石田「もう何も考えずに、奴隷のまんま、とにかく下さい、下さいって依存している体質をつくっていくっていうのが彼らの思う壺だと思うんですけど、『今年の総括、世界と日本』という今日のテーマに於いて、来年がどういう年になるかって言うと、来年は、もう一言で逆襲の年」

水島「うん」

石田「そういう1年になると思うんですよ。誰の誰に対する逆襲かって言うと、反グローバリズムのグローバリズムに対する逆襲」

水島「うんうん」

石田「こういう時代がやって来ると思うんです」

水島「うん」

石田「その準備段階にあった1年間で、今年の1年間だったんじゃないかなあと思うんですね。これは水島社長も、あちこちでデモとか抗議活動の活動をされて感じていると思うんですけど、色んな方が今、凄い磁石のように引き寄せ合っていると思うんですよ」

水島「うんうん」

石田「日本を良くしたいっていうね、まあ、反グローバリズムって何かって言ったら、一言で言うと愛国主義だと思うんですけど、愛国主義っていう神聖な部分とか、そういうレベルの高いものじゃなくて、そもそも俺らの生活をどうにかしてくれよっていう目先の生活に対する不満っていうのが爆発しかかっている人達が沢山、増えている。これが今の逆襲の時代に踏み込む一歩手前の準備段階だと思うんです」

水島「うん」

石田「これは日本だけじゃなくて、それに気づいたヨーロッパの国も、そういう国民が凄く多くて、そういう運動が今、世界全体で凄く起きているなっていうのが、その準備段階にあるなあって思うんですね。日本の場合、じゃあ、どうなのかって日本に置き換えると、まあ、例えばインボイスにしたって増税にしたって、もう103万円の壁にしたって何だってそうなんですけど、全く政治が国民の方へ目を向けていなくて、気が付いたらステルス増税になっていてインフレが起きちゃって、生活が大変じゃないかみたいな感じなのが物凄く顕わになってきている訳ですよ」

水島「うん、うん」

石田「顕わになっている中で、その103万の壁も勿論、さっき水島さんが、おっしゃった通り大切なテーマだけど、でも103万の壁の前に、自民党の馬鹿の壁を崩さないと…」

一同「(笑)」

石田「多分、にっちもさっちもいかないなっていう状態まで今、来ていて、国民がそれに気づき始めている」

水島「ええ」

石田「だから、僕も色んな活動をしていますけど、講演会でも YouTube でも何でもね、やっぱり、段々こっち側に異様に寄って来ていることに、何か気づく国民が凄く増えているから」

水島「うん、そうだね。それはそうですね」

石田「その国民達が今、何だかんだ言って自分も発信しなきゃならないなあとか、Xで発信をしたりとか、場合によっては抗議活動に参加したりとか、何らかの動きが段々目に見えて、大きくなってきた1年間だったなあと思うんですよ。これが来年、何事も無ければトランプ政権に替わる訳じゃないですか」

水島「うんうん」

石田「1月20日にトランプは大統領になる訳ですよ」

水島「うん」

石田「何事も無ければですけど」

水島「はい」

石田「1月20日にトランプさんが大統領に就任した時、そもそも、さっき水島社長がおっしゃったように、これまでとは、全く違う世界観を今、トランプさんは創ろうとしていて、トランプさんが変わった人間とか、とち狂った人間だとか、そんなんじゃないくて、世界がそっちに向いているのは明らかなんです。これはアメリカだけではなくて、もう、ありとあらゆる世界中の国々で、我々日本人が不満に思っているのと同じような状態にあるのが世界の、まあ、特にヨーロッパの国々でね。

そういう人達が居るから、トランプさんが今、凄く評価されているっていう時代に入ったと思うんです。これは、ある意味、新しい価値観で、新しい価値観っていうか、新しくも何ともないんだけど、気づいたっていうことですよ、

要は、これまで支配されて来たっていう、ディープステートに支配されて来た。これを何とかしなきゃいけないなあということで、これから動いていくと思うんですよ。トランプさんが向かっている方向を考えると、今の日本っていうのは、タイタニック号に乗っかっているようなものでね」

水島「うん」

石田「タイタニック号も、自民党がデカすぎて舵をとれない訳ですよ。このままいっちゃんデッカイ氷山にぶつかって日本崩壊っていうような、そういう割と瀬戸際にあると思うんですね」

水島「うん、うん」

石田「だから、誰が舵を切るのか、この舵を切って、タイタニック号の方向を、ぐわあっと、あっちのトランプさんの方に方向に変えていかなきゃならないんだけど、今、全然、変えられない状態で日本はどうなるのかっていうのを、来年、凄く注目していきたいんですけど。少なくとも今のままの自民党政権だと、日本はタイタニック号、氷山にぶつかるなっていう感じになると思うんです。この間の衆議院選の時に自民党は変わりますと、プロモーション

ビデオを作って何かSNSで流していましたがね、石破さんが話していて『魂の変革です』とか言っている訳ですよ」

一同「(苦笑)」

石田「どんなんだろうって、ビデオを観たら『魂の変革です』と。ルールを守るとか言っていますよね」

水島「(笑)」

石田「ルールを守るって、それが魂の変革なのかと。ルールを守るっていう話ね、小学生のレベルの話じゃないかっていう。はっきり言って、自民党がやっている事はそんなレベルですよ。そんな中で日本は本当に、今迄、バイデン政権だったからディープステートの傘下に居たので、もう思考停止でも何とか続けていたと思うんです。思考停止っていうのは、言われたことを、はいはい、はいはい」

水島「そうだね」

石田「とにかく何でも頭を下げて、二つ返事で、はいはい言って、どんどん国民の税金を、むしり取って海外に送る、アメリカに送るっていうね、そういうことをやっていけば、何とか生き延びて来られた政権だったんですけど、これがトランプさんになったら、そうはいかなくなる。トランプさんが大統領になったら、日本は思考停止ではなくて、自分で考えて、トランプ政権に対して提案をするようなリーダーが出て来ないと、日本はどんどん逆にむしり取られますよ。トランプさんは商売人ですから」

水島「うん」

石田「日本は叩けばお金が出て来るなあと思ったら、きっと叩いて、どんどん金を引っ張り出しますね」

水島「うん」

石田「1兆円どころか5兆円を払えと、いやいや6兆円、7兆円、払えと」

水島「うん」

石田「そういうようなことを叩きつけて来ると思うんですね」

水島「うん」

石田「そういうのに、はい、分かりましたあって、じゃあ、4兆円、払います、5兆円、払いますなんて言っている自民党は、もう駄目で、そこでね、例えば、日本の近海には石油もガスもメタンハイドレートも埋まっているけれども、いつまで経っても、ずう〜っと試掘段階で商業生産に切り替えられない訳ですよ。恐らくアメリカからの圧力で、日本はエネルギー自給国にさせてはいけないという、そういった思いがあるんでしょう。

例えば第7鉱区とか茨城のガス田、宮古島のガス田とか、小笠原のメタンハイドレートとか、ウクライナに何兆円も払うお金があるんだったら、そこに全力投資して、日本はエネルギー独立国、純和製のエネルギーを作っていた方が、よっぽどいいんじゃないかって思ったこともあったんだけど、じゃあ、それをトランプさんに提案するのは、日本はエネルギー独立国になりたいと…」

水島「うん」

石田「第7鉱区も小笠原のメタンハイドレートも天然ガスも全部、自分のところで開発をして、エネルギー自給国になるんだけど、その為にアメリカもね、ここの開発と一緒に加わらないかと。トランプ政権にとって、これだけビジネスの旨味があるよと。アメリカは、これだけ、儲かるよと。だから、こういうのを一緒にやろうよみたいな、そういう提案を、やはり日本の政府がアメリカに対して出来るような、独自のアイデアっていうものを自分らで組み立てて、これを、新しいトランプ政権のアメリカに提案できるような日本になっていけば、日本はいけると思うんですよ」

水島「うん」

石田「まだまだ捨てたもんじゃないなと思うんだけど、でも、そうなるには思考停止の政権というのを一刻も早く引き摺り降ろさなきゃならなくて、思考停止政権から、じゃあ、いかに、ちゃんと考えてアイデアを描ける、ビジョンを描ける政権を、国民一人一人が求めて、それをつくっていけるのかどうか」

水島「うん」

石田「その為の準備の段階となった1年なんじゃないかなあと思いますね」

水島「なるほどね」

石田「だから、来年、そこでどうなるかっていうのは、我々は実際、どう動くのかっていうのが問われて来るんじゃないかなあと思います」

水島「そうですね」

石田「うん。以上です」

水島「とにかく外交も内政も、どうしていいか分からないみたいなね、ただ、ずるずる引っ張っているだけみたいな状態が続いているし、今、石田さんが言ってくれたように、これが問われるのは、最近、日本テレビなんかでも、ディープステートっていう言葉を使うようになってきているんですね」

石田「あ、そうですね」

水島「え〜っ、日テレ、ディープステートっていう言葉を使うの？つい2〜3年前まで、我々が使っていると、何か陰謀論者の塊みたいなね…」

石田「陰謀論って言って来た人達がね」

水島「うん。日テレのニュースの中でディープステートとかね、勿論、トランプが使ったりしているからなんだろうけども、そのぐらい変わって来て、陰謀論だって非難していた人達が、ウクライナ戦争とか、ああいうので分析や、そういうのが全部、破綻したっていうね。まあ、こういうことですね。だから、いつも言いますけど、今年、明らかになったのは戦後の保守と言われるね、実は、我々も入っていたんですけども、そういう人達が典型的なのは、あの女性ですけど、トランプを再選させる訳にはいかない。ウクライナを負けさせる訳にはいかないって堂々とXでね、まあ、櫻井さんっていう人ですけどね」

石田「あ、言っちゃった（笑）」

水島「書いちゃった訳ですよ」

石田「そうそう、そうそう」

水島「これ、お前、どうやって落とし前をつけるんだっていうね。私は、何を言っているんだ、あんたはっていうね。これが戦後保守の限界だっていうことを言ったんだけど、もう、すっとぼけて、今、石破非難ばかりやっているんですよ」

石田「う〜ん、掌返したようなもの」

水島「そう。もう、いくら叩いても大丈夫だと思うとねえ、私は、そういうのは凄く嫌だけどね」

石田「うん」

水島「うん。だから、そういう意味で言うと、この問題について、今、言った様に、色んな意味での整理というか準備とか、我々も、もっと、しっかりしていかなきゃいけないけど。でも、本当に、そういう段階に来ている、過渡期にはあるっていう感じがしますけど」

用田「その大きな流れを与党だけで決めて、それで次にエネルギー政策はこうだと」

水島「うん」

用田「或いは、今、言った税金はこうだと、与党の税調で決めているじゃないですか」

水島「そうなんですよ」

用田「毎年、毎年、どうして税調が税金のことを決められるのって、僕は聞きたいんだけど、防衛増税も決めちゃっているんですよ」

水島「うん、そう」

用田「これ、とんでもないですよ」

水島「経済諮問会議ですよ。つまり議員じゃない奴らが、みんな、役人と一緒になって、決めているって」

用田「ええええ、ええ。それは日本のディープステートですよ」

水島「まあ、そういうことです」

富岡「だから、そういうのは結構、判って来て、国民は今、おっしやったようにね、財務省の問題とか、自民税調の実態とかっていうのがね」

用田「歯がゆくて仕方がないんですよ。新聞を見てて税調が増税しますって、何、国民に諮ったかと」

水島「うん、まあ、そういうことはないのが、段々バレてきましたね」

富岡「ばれてきました」

水島「あれ、諮問会議から始まって一体、誰が日本の政治を決めているんだ。勿論、そういうのは竹中さんなんかは典型だったんだけど、じゃあ、竹中の後ろには誰が居るかって言っ

たらワシントンの方にね、それこそディープステートが居る訳でね」

一同「うん、うん」

水島「こういうような状態が明らかになって来たけど、未だそれを中々認めない人達が居るから、この間、産経新聞の2週間ぐらい前の社説で、ウクライナとか全体のことを統括した記事を見た時、これ、拙いんじゃないのというね、これじゃあ、間違えるねっていうことを思いましたけど、宇山さんから今年の総括を聞いてみたいと思います。宇山さん」

宇山「はい」

水島「お待たせしました」

宇山「はい。私からは、この年末に起こりましたシリア問題と韓国問題。この2点について、お話をさせて戴きます」

水島「はい」

宇山「まず、このアサド政権の崩壊ですけれども、日本のメディアとか似非保守の人達は、プーチンの失敗であるということを誇張して言っているんですね」

水島「そうでしたね」

宇山「それを見た事かと。プーチンの失敗で、失政でシリアを失ったぞ、良かったなあと言って喜んで、こういうことを言っているんですねけれども、私は、事の本質というのは、そういう単純な話では無いと思うんですよ。そもそも、このシリアの問題に関して、反政府勢力を支援していたのは一体、どういう勢力なのかと」

水島「うん」

宇山「まず、第一にイスラエルがあると思います」

水島「はい」

宇山「そして、その背後にはアメリカのネオコン勢力というものが必ず、あったに違いないというように思う訳です。このアサド政権を攻撃し、シリアで政変を起こすことに成功すれば、ロシアをシリアにおびき出すことが出来るという目論見が、彼らにはあったんだろうというように思うんですね」

水島「うん」

宇山「しかし賢明にもプーチン大統領は、そのおびき出し作戦に乗らなかった訳です」

水島「うん」

宇山「ロシアが自ら、シリアに介入するということになれば、もう泥沼になってしまいうということを理解していたプーチン大統領は、これには手を出さなかったというのは、大変、いい判断をしたんだろうというように思います。もう一つ、ウクライナが、シリアの反政府勢力にドローン等を提供していたのではないのかという報道が複数、出ておりますね」

水島「はい、ありますね」

宇山「ワシントン・ポスト等も、このことを報じております。恐らく、私はそうだろうと思います。ウクライナは、こういう形でシリアに介入をして、政変が起これば、やはりロシアがシリアにおびき出されざるを得ないと。自分達のウクライナ戦線を優位に戦うことが出来るという目論見で、ウクライナ軍がドローンをシリア反政府軍に提供したものだということに思います。

また、このロシアは以前からアサドに対して、このままでは政権がもたないぞということを警告していたということも非常に重要だと思うんですね」

水島「うん」

宇山「同時に、この反政府勢力が今、暫定政府機構になりました。シリア解放機構、まあ、シャーム解放機構という組織がありますね。HTSと呼ばれますが、政変以前から、実はそこにロシア側は接触をしていたということも明らかになっていると。そういったことを考えれば、単純にロシアが失敗であった、プーチンの失態ということでは決してないということだと思うんですね」

水島「うん」

宇山「それから、このアサド政権の崩壊の主な理由は、私はロシアがアサドを助けなかったということよりも、むしろイランがアサド政権を守らなかったということが非常に大きいというように思うんですね。ご存じの通りアサド政権は世俗シーア派のアラウィ派を信奉しております」

水島「うん」

宇山「イランが同じシーア派ということで、これを支援して来た訳です。イランは今年の7月、滞在先のイランでハニヤが暗殺されるなどして、それに対して7月、イスラエルに向けてミサイル攻撃をやりました」

水島「うん」

宇山「10月にもイスラエルに向けて弾道ミサイルを数百発、撃ったということがあり、4月にもイランはイスラエルを攻撃しているんですが、いずれにしても、これらの弾道ミサイルで大きな打撃をイスラエルに与えるということにはしなかった訳です」

水島「うん」

宇山「まあ、大人の対応をずうっとしてきたということだと思うんですね。このイランは、この間、ヒズボラにも十分な支援を行き届かせませんでした」

水島「うん」

宇山「ましてやアサド政権にも支援を行き届かせなかったんです」

水島「うん」

宇山「つまり、イランは中東で後ろ盾としての存在感を失っていたという部分があるかと思うんですけども、この状況を見たシリアの反アサド勢力が、イランが最早、出て来ないと動きが執れないということで、このアサド政権の攻撃ということに踏み込んだらろうというように思います」

水島「うん、うんうん」

宇山「じゃあ、このイランが今後、どうなるかということが焦点になって来ると思うんですけどもね」

水島「うん」

宇山「イランにとっての、このシリアの失敗が、私は革命防衛隊の力を強めるのではないかというように見ておるんですよ」

水島「うん」

宇山「再びイランの強硬論が再浮上してきて、革命防衛隊を勢い付けるといふようなことになって来るのではないかと」

水島「うん」

宇山「ペデシュキアン新政権の対話路線というのが掲げられておりますけれども、この路線というのは危うくなってくのではないかなと。そういった点では、トランプ新政権にとって、この中東問題が難しい課題になって来るんだらうなと言ふように思います。それと、やはり、このイスラエルの動きということも、ちゃんと見ておかなければならないと思うんですが、私は、このイスラエルが反アサド勢力にテコ入れしたのは間違いないと思いますよ」

水島「はい」

宇山「アサド政権の崩壊後、イスラエル軍は電光石火のスピードで、この地上軍をシリアに進攻させておりますね。これは事前に周到な準備をしていたからこそ、出来る芸当であるというように私は思います」

水島「うん」

宇山「つまりイスラエルは、事前にアサド政権が崩壊するということを判っていたに違いないと」

水島「うん」

宇山「やはり、このアサド政権崩壊には、このイスラエルが、かなり事前に諜報部等を通して絡んでいたものと見なければならぬんだらうと思います」

水島「そうですね」

宇山「当然、このイスラエルの動きには、アメリカのネオコン勢力も連動をしておると思いますし、このシリアの政権が崩壊をしたことで、イランとヒズボラを繋ぐ地政学的ルート、後方支援のルートが途切れたということは、イスラエルにとっては大きな成果であったという風なことも考え合わせなければならぬというように思います」

水島「はい」

宇山「それから、ちょっと長くなりますけれども、韓国問題についても是非、触れておきたいと思うんですね」

水島「はい」

宇山「先程、荒木先生からご高見を賜りましたけれども、この12月3日に尹大統領が出した非常戒厳で、結局、弾劾訴追というものが国会で14日に可決をしておる訳なんですね。実に、これは光州事件から44年ぶりの非常戒厳であったというように思います」

水島「うんうん」

宇山「尹大統領は非常戒厳に、何故、出したのかということの理由を、この野党が大勝した4月の総選挙」

水島「うん」

宇山「これに不正行為があったんだということを言うておりますけれども、実際、この不正選挙があったんだったら、政治の表舞台で堂々と証拠をあげて追求していけば済む話なのにね、そんな非常戒厳なんて出すというような話では、私は無いと思うんですね」

水島「うん、うん」

宇山「実際のところ、何故、尹大統領が、こんな非常戒厳を出したのかっていうのが、我々日本人には中々解らんところだろうと思うんですね。私は、こう考えます。かつて、朴正熙時代、1972年に維新クーデターというものがございました。朴正熙は、このクーデターによって、今回と同じように非常戒厳を出しまして」

水島「出しましたね」

宇山「そして軍部を一気に掌握して、憲法を改正した訳です」

水島「うん」

宇山「それで、今後は、もう二度と直接、大統領選挙を行わないと、朴正熙は事実上の終身大統領になるということに成功した訳です。こうして、この政権の基盤を完全に独裁政権として固めて行ったというのが、朴正熙政権時代の72年維新クーデターでありました」

水島「はい」

宇山「私は、尹大統領が朴大統領と同じことをやりたかったのではないかなあというように思うんです。このキム・ゴンヒ夫人の不正疑惑の追及等があり、国会でも自分の思う通りに中々進まない。この大統領の非常大権を得る為に、クーデター紛いの非常戒厳を出したというのが実態なんだろうなというように思います。日本人には、そんな馬鹿なことを今の時代にやるのかと思えるのですが、やっぱり韓国はそういうことをする国なんですね。

実際、1979年12月12日には全斗煥大統領が、まあ、大統領になる前の話ですけども、こういうクーデター騒ぎによって、実際、政権を獲得していくというようなことなどもありました」

水島「うん」

宇山「こういうことは韓国の歴史の中で、繰り返されて来た訳です。ですから韓国人にとっては、非常に既視感のある事柄だろうと思うんですね。尹大統領は盛んにこう言うんです。韓国の野党の中に、従北勢力が入り込んでいるんだということを言うております。これが陰謀論であるというように韓国メディアでは伝えられているんですが、本当に従北勢力が、従北っていうのは北に従う勢力のことですけども、こういった勢力が韓国に蔓延していると

というのがね、陰謀論なのかどうかという点を、よく考えてみななければならないと思うんですけども、私は陰謀論ではないというように思いますよ」

水島「現実にそうですよね」

宇山「1997年、韓国に亡命した朝鮮労働党の黄長燁（ファン・ジャンヨプ）元書記は、韓国には5万人の北朝鮮の工作員が潜伏していると証言しているではありませんか」

水島「うん」

宇山「文在寅（ムン・ジェイン）前大統領は、北朝鮮の工作によって作り出された大統領だと思います。かつて、朴槿恵前大統領は、この従北勢力というガンを一刻も早く取り除かなければ、国が崩壊してしまうということを何度も言いました。民主労総という左派勢力がありますけれども、この左派勢力の幹部がついこの間、北朝鮮から直接、指令を受けていたということで逮捕されましたねえ。この指令書が何百通も出て来たということで挙げられておりましたが、やはり、従北勢力というのが未だにあると思います。私は、こういう従北勢力というのは韓国だけのことではないと。我が国にも沢山、入り込んでいます。対岸の火事ではないというように思います。

いずれにしても、来年、この韓国と日本が国交正常化60周年を迎えますね。日本の政府も交流事業を進めていくというようなことを言うておりますけれども、大変、申し訳ないんですけども、そんな韓国のような国と、日本が連携をしていくというのは極めて難しいのではないかと思います。大量の北朝鮮の赤化工作が万般に及んでいる、大量の共産主義者が、この韓国には潜り込んでいる。どうして、こんな国と連携していくことが出来るのかと、私は考えます。以上です」

水島「はい。有難うございます。この中東のシリア問題と韓国の問題をお話し戴いて、これは、やっぱり、また、皆さんで話をしてみたいと思います。政府は極めて注目をしていると言うだけで、どういう風にしたいのかとかいうのは全く出ていません。それと、もう一つ、やっぱり、さっきお話し戴いたけど、日朝議連って未だあるんですよ。あるんですよ。で、この人達は陰に陽に色んなことを、朝鮮との繋がりやでやっているんだけど、我々の国の一番の問題は、まず朝鮮総連に破防法の適用も何も出来なかったっていうことを含めて、もっと言うと、資産没収っていうか破産措置もやろうと思えば出来た。決意が無いだけであってね、それだけ、さっき宇山さんが言った様に国会議員の中にも、所謂、そういう北朝鮮に近い人とかシンパシーを持った人達も随分、沢山、居る。それが日本の為に役に立てばいいんですけどね、向こうの為に役に立つことばかりやってきたっていうねえ」

シュラー「うん。うんうん」

水島「こういうことも含めて、それと、もう一つ、宇山さんの指摘で言うと、朴正熙時代の問題で言うと、ああいう風に革命をやったんですけど、朴正熙が金載圭（キム・ジェギョ）、というKCIAの部長に殺されたのは、報道によればですけど、キムが食事中に立ち上がって、大統領、申し訳ありませんと言って、朴正熙大統領を撃ち殺したっていう、これは、朴正熙が秘かに核武装を進め始めたという噂もあった訳でね。そういう意味で言うと、韓国の場合、アメリカというものの影響力は、まだまだ、勿論、実働部隊、海兵隊は、もう韓国から引き揚げていますけど、実際に米軍は未だ、あそこにちゃんと国連軍としても米軍としても居るということ考えた時、これが全くアメリカが関与しないまま尹大統領がどんなクソ度胸があるとしても、ああいうことをやるとは思えないんですよ。やはり、ある種の黙認

か容認か、或いはお勧めか、色んな形の何かがあって何が起きるかっていうと、正に、私の持論で言えば、混乱が起きる。

混乱が起きて喜ぶ人達が居るといことです。私達日本人は、みんな、平和で穏やかな生活を望んでいると思いますけど、ウクライナを見ても解るように、パレスチナを見ても解るように、戦争で金儲けが出来ると知っている人達が沢山、居るといね。だから、韓国の場合、そこを見ておかなきゃいけないだろうなあと思います。

それから、さあ、この企んだというのは今、逮捕とか色々されていますけど、本当は、この行く末がどうなるんだろうと。それから本当に反動が何も無いのかどうか。えー、みんなの民主党でしたっけ…」

荒木「共に民主党」

水島「ああ、共に民主党か。これが本当に北そのものの政党だっていうんだけど、これも、まだまだ流動的でしょ？これは、どうですか」

荒木「これは、ちょっと逆説的な考え方かもしれないですが、北にとっては、共に民主党の政権の方が嫌なんじゃないかという気がしているんです」

水島「ああ、まあ、いや、そこですよ」

荒木「要は、尹錫悦（ユン・ソンニョル）政権という保守政権であれば、あいつは敵だということ、はっきり切れますけど」

水島「うん、はっきりね」

荒木「私達は仲間ですって言われてしまったら、でも金は欲しいし、交流しなけりゃ、金は貰えない。でも交流すれば情報が入って来る。それが一番、怖いので、だから、1年前に、もう統一しないって言った時、やっぱり一緒に言っているのは、要は、韓国の民主と言われ、民主何とかっていう連中も結局は同じことなんだというようなことを言っていますね」

水島「ああ～そうですよね」

荒木「だから今回も3日に戒厳令があって、北朝鮮が方針を出した、何か言ったのは1週間ぐらいあとですね。11日後だったかな」

水島「はい、ちょっと待ったんですね」

荒木「ということで、だから一体、どうしていいんだか、よく分からなかったと思います」

水島「いやいや…」

荒木「恐らく」

水島「むしろ、もう一つ、これは今日、出ていないんですけど、宇山さんにも伺いたいんですけど、中国が相当、絡んでいるというね。北朝鮮が完全にロシアの影響下になっちゃったので、中国は韓国を自分の影響下に置きたいからやったっていう、そういう噂もあるんですよ。この辺はどうですか」

荒木「今、中国の影響ってことだと、完全に今の野党の方は圧倒的に親中ですから」

水島「なるほどね」

荒木「今の韓国人の基本的な情緒から言うと、反中っていうのは非常に高くなっているんで」

水島「うん。そこはないですか」

荒木「う～ん、ただ、まあ、中国からすると、北朝鮮がロシアへ行っちゃっているんで、だから北朝鮮への面当てという意味でも、韓国の方へっていうのはあると思いますけどね」

水島「うん。そうですね。宇山さんは、どうですか」

宇山「はい」

水島「中国の謀略工作的なイメージっていうのは。そういう噂もあるんですけど」

宇山「はい。私は、尹政権であろうと、この野党の李在明（イ・ジェミョン）一派であろうと、やはり、この中国に対するシンパシーを非常に強く持っているというのは、韓国の歴史の中で共通したことだろうと思いますね」

水島「まあ、そうですね。それはそうですね」

宇山「これは、野党、与党を問わないというように思うんですね」

水島「そうですね」

宇山「やっぱり中国様の言う事が絶対的。何と言っても、この韓国の貿易は対中貿易っていうのが一番、大きい訳ですよ」

水島「そうなんですよ」

宇山「その中国様から、そっぽを向かれたら韓国という国は生きていくことが出来ない訳です」

水島「はい。そうですね」

宇山「ですから昔ながらの属国韓半島という政治構造というのは、今日に於いても、決して、変わらないんだらうと思うんですが、しかし、その中国の望みとしては、やはり、尹政権というのは扱い難いと」

水島「うん」

宇山「やはり親米的で、より李在明（イ・ジェミョン）達、野党の政権がなってくれた方が、扱い易いし、荒木先生がおっしゃるように、今、北朝鮮は韓国との統一政策をやめるというようなことを、事実上、言っている訳です。それから、あの弾劾訴追があった1週間か、10日位してから北朝鮮が発表した時、大韓民国の尹大統領という言い方をしているんですね」

水島「うん」

宇山「北朝鮮は今迄、大韓民国という国を一度も認めたことは無いんですけども…」

水島「最近ですよ」

宇山「しかし、それを大韓民国という言い方をしているということは、北朝鮮にとっては、

大きな変化であって、実は、もう相手にしたくないと。韓国を相手にしたくないという考え方だろうと思うんですが、これを、もう一度、くっつけ合わせて中国の意のままに操っていきたいという思いは、やはり中国側には強くあるという点で、この尹大統領のクーデター騒ぎに中国側が一枚、絡んでいたとしてもストーリーとしては、おかしくないのかなという風には思います」

水島「なるほどね。この問題について、他に何かご意見がありますか」

用田「あのう…」

水島「はい」

用田「私も、まだ情報をしっかり持っている訳じゃありませんが、今、宇山さんの話を聞いていて、私も動機が分からなかったんですよ」

水島「うん」

用田「どうして、ああいうことをするのかなというのは心情として、宇山さんのおっしゃったことで、そういう動機があるんだなと。逆に言うと、そういう動機があると、それを上手く利用しようとする奴が出て来る訳ですね。それは、まあ、私、個人の感覚からすると、中国というよりも基本、やっぱりアメリカだろうなと思っています」

水島「うん」

シュラー「うんうん」

用田「今のバイデン政権が終わってトランプ政権に繋がるという、この過渡期に酷いことを、いっぱい、やっている訳ですよ」

水島「うん」

用田「ウクライナだって核戦争になるかならんか判らんのに核戦争なんか恐れるなど、日本に言って来たケーガンが居る訳ですよ」

水島「うん」

用田「だから何してもおかしくないだろうと思うんです。ただ、朝鮮半島は野党の指導者も、もう居なくなる訳ですよ」

水島「うん」

用田「弾劾をされたり、裁判をされたり、カオスじゃないけども、朝鮮半島自体、北朝鮮を除いて韓国自体がリーダーの居ない時代、これは何か聞いたことがあるなと思ったら日本に来たグローバリストの、何ですか、すみません、今、名前を忘れた」

水島「韓国人ですか」

用田「いやいや、日本に来て、私が、この前、ちょっと紹介しました。えー、すみません。出て来ないです。後から出てきたら言います」

水島「政治家？」

用田「ブレア。ブレアです」

水島「ああ、ブレアね」

用田「イアン・ブレマー (Ian Bremmer)」

水島「ブレマー、はい」

用田「彼が一生、日本に、中国とくっつけよと。これから指導者の居ない世界になって来るという話をしていたのが、そっくり韓国に当て嵌まって、指導者の居ない韓国になるということで、難しいだろうけども、そういう不安定な状況を朝鮮半島に残すっていうのが、バイデンのトランプに対する、一つの…」

水島「はい、そうです。お土産ですね」

用田「お土産だというのが、いや、私は、そういう風に思うんだけども」

水島「いや、私もそうですねえ」

用田「色々と考え方を聞いていると、私も未だ確信はありませんけども。先程も、ちょっと申し上げたように、核を持たせないというメッセージは必ずあると思うんですね。所謂、核推進、韓国が核を持とうという動きが非常にありますね。だから、それを尹大統領も、まあ、それから、その下の国防長官も核容認派だった訳ですから、基本的にそれを進め、韓国が核を持つと、日本が持つからやめろと態々言いに行くぐらいですから、それは…」

水島「いや、戒厳令をやっちゃうと、その中で核武装を言い出した可能性ありますね」

用田「あります」

水島「はい」

用田「でも、それは可能性の話であって、実は、色んな可能性は否定出来ないんだけども、朝鮮半島が、こうなって一番、喜んでいるのはネオコンの連中、戦争をやる連中だろうなあという気がして、これがお土産かなあという感じはしているんですけども」

水島「そうですね」

荒木「まあ、韓国の核武装って、基本的に国民の中で反対している人が、あまり居ませんか。与野党、含めて」

用田「なるほど」

荒木「あのう、昔から」

用田「ああ、野党も含めてですか」

荒木「野党も含めてです」

用田「ふう〜ん」

荒木「ともかく核さえ持てば、もう大国に振り回されないで済むっていうのは、ずうっと、DNAとして存在しているんで」

用田「ありますよね」

荒木「だから、今から20年ぐらい前に韓国の小説で『ムクゲの花が咲きました』という…」

用田「ああ、はいはい」

荒木「小説ですね。南北で協力して核を持つという」

用田「はいはい」

荒木「だから、あれが物凄くヒットして、まあ、映画まで出来てとかいうのがありましたけど、それは、やっぱり歴史的にずうっと虐げられてきたので、とにかく核さえ持てば、今の北朝鮮も全くそういうことですけど…」

一同「うん」

荒木「そういうのが凄くあるので、だから日本人と全く感性、気持ちが変わりますね。そういうことをやったら、どうなるのかとか、被害がどうかとか、そんなことは全く考えず、とにかく核を持てばどうにかなるんだというのがあるので、それは今の大統領だけじゃなく基本的に国民的な情緒…」

用田「まあ、そうですねえ。だから、先程、申し上げたように『核には核で』という発起人になっているのが、元陸軍の大將だという話を聞いたんですけども」

荒木「ええ」

用田「そのあと軍部の中でも相当、そういう信奉者が居るということで」

荒木「ええ。特に、今、これで、トランプで在韓米軍の撤退とか、そういうことも起きるかもしれないので…」

用田「起きるかもしれないですね」

水島「そうですね」

荒木「その場合には持たなきゃいけない。でも、逆に韓国の保守派の中で、もう日本と一緒に持ちちゃおうと」

用田「うん」

荒木「日本と一緒に持てば、アメリカの圧力も大分、避けられるだろうということを、本当に公然と言う人が居ます」

用田「なるほど。でも日本としては、ちょっとご勘弁をという感じですね（微笑）」

荒木「まあ、巻き込まれない方がいいんですけども…」

用田「でも、日本は日本で考えなきゃいけないんですけどね」

荒木「そうですね。だから、別の問題ではあるんですけども、韓国の中の情緒という意味では、そういうことで、さっき、宇山先生が言われたように、経済的には、とにかく韓国も、中国に物凄く依存しているんですけど、基本的に韓国人って中国人を嫌いですね。特に、それが今、更に強まって来ていることは間違いなくて。そういう意味でも、だから、もう、

アメリカには勿論、安全保障で依存しているし、中国には経済で依存しているし、こういう状態を何とかしたいと」

用田「だって日本もそんな感じですよ（苦笑）」

荒木「そう。だから日本の状況によっては、依存する先が日本になったって全然、おかしくないですよ」

用田「なるほどね」

水島「ね、はい」

シュラー「まあ、私から見ると、ウクライナの支持の為、ネオコンが動いているとか何かね、ヨーロッパの国々も出来ないんですよ」

水島「うん」

シュラー「もう武器も無い。だから韓国ぐらいかなと思っていて、それは韓国の国民もウクライナ戦争には絶対、反対ですよ」

水島「なるほどね」

シュラー「でも、それも韓国も、また支援が出来る様にと何かね」

水島「はい」

シュラー「うん」

水島「まあ、バランス・オブ・パワーということを考えた時、韓国、北朝鮮、日本がみんな核武装したら、東アジアはどうなるんだろう。そうすると戦争できない場所になっちゃう」

シュラー「うん」

水島「アメリカが要らなくなっちゃう」

シュラー「うん」

水島「困っちゃうなっていうね。何処かで、そういう日本も混乱していて貰いたいし、ああいう石破政権とか何だか訳が分からないまま言う事を聞くから、鶴の様な、こういうね、頭も無い、能力も無い、言葉も無い、マナーも無いっていう、こういう人達の方が有難いというようなことがあって、私は本当にアメリカのプレゼンスっていうのが、トランプがどういう方向を持つかは別として、石破さんは今度、トランプが大統領にならない前に会ったら本当に問題ですよ。

思いやり予算1兆円、毎年、使って来たっていうけど、2兆円にしろと言うかも分かんないですよ。居て貰いたかったらね。でも、石破さんは、そういう発想じゃなくて、じゃあ有難うございます。じゃあ、いいですから、うちは核武装しますっていうことを言える度胸なんて、これっぽっちも無いから、蚤の心臓の人が首相やっている訳だから」

用田「だから20日の前、就任式の前に行く理由が解らないんですよ」

水島「いやいや、私から言うと言っちゃいけないっていうね（苦笑）」

用田「行って何をやるのと」

水島「そうなんです。要求されるだけですよ」

用田「安倍さんが行った時とは状況が違いますからね」

水島「いや、全くそう」

用田「今回は、あの時のトランプ大統領とは違いますからね」

水島「いや、だから、本当に、よく分かんないんだけど（苦笑）」

石田「鴨がネギ背負っていくようなものですよ」

水島「そうそう、そう（笑）もうネギを、たっぷり背負ってねえ」

石田「うん」

水島「いくらでも言って下さいって言って、何でもやりますっていうねえ。本当に要求されたら断りようが無いでしょう」

石田「うん」

水島「ウクライナに、もっと金を出してやれよとか言われたら、お前、自由と民主の為だ、お前、それを言っているんだけど、同盟深化する為に、金を、もっと寄こせって言ったら、石破さんは、何を言っているんだ、冗談じゃないよなんて言えるような度胸はありませんからね。それは、もう分かっちゃっているから」

富岡「最初は、日米地位協定を変えるとかね（苦笑）、やっちゃっていますから」

水島「首相になる前は、みんな、色んな事を言っていたんですよ」

用田「でも岸田のあれじゃないですか、予算じゃなくて、あの資産ばい、資産じゃなくて」

水島「ああああ」

富岡「言っていましたね」

水島「資産倍増ね」

用田「所得倍増」

富岡「所得倍増だ」

用田「所得倍増と言って、それが、いつの間にか変わってしまったじゃないですか」

富岡「はい。そうですね」

用田「株式がどうのこうのって」

富岡「そうそう」

用田「嘘つきですよ」

富岡「嘘つきです（笑）」

水島「さっき石田さんが言っていたように、色んな政策もね、みんな、言っている事、違うんでね」

用田「嘘なんですよ」

水島「そうですよ。それでステルス増税ばかりやってねえ。本当に、みんな、頭に来ていますよ。何が森林税だとか（失笑）、だから、そういう意味で言うと、この内政の問題で、金だけ取られて、じゃあ、その金が何処へ行くかって言ったら、能登には行かない。国民には行かない。ウクライナとか、ああいう関係の無い所、アメリカ国債、買うとかね、そっちの方に行っちゃっているっていうね、こういうことは段々、みんな、気づき始めたっていうかね」

用田「後段になったら、先程、ちょっと申し上げましたように、アメリカ、トランプ大統領、それから中国が、我々の感覚として、我々がセンスとして煽られている部分を払い除けて、本当に脅威とは何なのか」

水島「うん」

用田「或いはアメリカと中国が、どういう風にお互いを見合っているのかと」

水島「そうですね」

用田「これから分析せないかんとこですけど」

水島「そうですね」

用田「その初めの所を少し分析したので、その部分を頭に置かないと、少なくとも石破さんは、それを頭に置かないでトランプ大統領に会っちゃいけないと、私は思っているんですね」

水島「うん」

用田「アメリカの大国と中国の大国は、思っている認識が違うんですよ」

水島「うん」

用田「太平洋を二つに割って住み分けようねって言ったのは、あながち嘘じゃないんですね」

水島「だって、今、丁度、第一列島線だから、ハワイやグアムまで行って、どっちかと言うと、本当に、昔、将軍が言った太平洋分割ね。半分ずつ。段々と、これに近いものになって来ているじゃないですか」

用田「合理的にそうなるんだろうと思います。だから、ちょっと、あとで話をします」

水島「その時、日本はどうなるかっていうことですね」

用田「はい。そうですね」

水島「はい。シリアとかウクライナというのをよく見ておいた方がいいと思いますね。はい。そういうのも参考になると思います。じゃあ、一回、お休みさせて戴きます」

一同「(礼)」

<後半>

水島「後半になりました。これからは、先程、色々現状分析その他、色々やって貰いましたけど、やっぱり中東の問題ですね。イスラエルが、これから何処までやるんだ。私は自分の番組で、長期とは言わないけども、今、実現したのは、イスラエルのネタニヤフ政権によって、実は世界を動かしているのはバイデン政権でもなくて、アメリカも、実は、まあ、中東もイスラエルの支配。もっと言うとユダヤの人達ってというのはシオニストですね。こういう人達の支配が現実的に実現しちゃっているんじゃないかと。長く続くとは思いませんけども、そういう話も、ちょっとしたんですね。

この問題で言うと、冒頭にちょっと言いましたように、それから宇山さんから指摘があったように、イスラエルが周到な準備をしていたシリアの問題。ザ・テレグラフというメディアですけど、これも、先程、ちょっと読み上げたと思うんですけど、アメリカも、これに準備をしていたということで、偶然の出来事ではないということがあって、こういう今の現実になる。もう一つ言うと、ちょっと話が出なかったかも分からないですけども、トルコがやっぱり、所謂、シリア民主軍ですか」

シュラー「うん」

水島「クルド族の者に対して攻撃を加えているという。これは絶対に許さないと。シリア民主軍ってというのは、アメリカの援助でやっていたシリアの北部に居るクルド族らしいんですけど、石田さん、めちゃくちゃ乱れているようなね（苦笑）、もう各部族はゲリラ組織っていいのか、何とか、これが今、それぞれ群雄割拠している訳でしょ」

石田「そうです。シリアに関しては、トルコの利害とアメリカの利害って反するんですね」

水島「ああ～」

石田「アメリカ、イスラエルってというのは、クルドを動かしてイランの中でスパイ工作をやらせたとか、アサドを倒したとか何か色んな動きはやっているんだけど、だから、クルドってというのはトルコ国境に居る…」

水島「はい、そうですね」

石田「民族であって、一概にトルコのエルドアン政権がクルド民族を弾圧しているという訳でもなく、クルドの過激派をね…」

水島「うん。PKKですね」

石田「まあ、強く弾圧して攻撃しているんですけど、PKK」

水島「はい」

石田「クルディスタン労働者党ですね。結局、彼らが分離主義者であって、トルコから独立をするという運動をずっとやっているの、それを抑える為にクルド民族、クルディスタ

ン労働者党を抑えているという感じですよ。その一方で、イスラエルはクルド民族をコントロールして、イラン国内の攻撃を仕掛けているっていう感じなので、本当にシリア内戦というのは登場人物も多いし、もうグッチャグチャの構造がある中で、アサド政権が今回、倒れて亡命して、水島さんがおっしゃる通り、その数時間後にはネタニヤフ政権は、シリア全土への攻撃命令を出しているんですよ」

水島「そう。85か所ですか」

石田「もう、ちゃんと準備していた為に…ん？」

水島「空爆してね」

石田「ああ、そうですね」

水島「うん」

石田「それで、今のイスラエルが目指しているのは、用田さんの最初のパネルにも出て来ている大イスラエル」

用田「うん」

シュラー「うん」

石田「大イスラエルっていうのは、今のネタニヤフ内閣がもう公言しているんですね」

水島「はい」

石田「大きなイスラエルを作るっていう、ナイル川からユーフラテス川までの間を、今、ユダヤ人の約束された土地であると。これが聖書に書いてあって、殆どのイスラエル人はそんなもの信じていないけれども、過激派の原理主義と言われるユダヤ教のシオニスト達は、グレート・イスラエルを本当に創るんだと。その創るんだと考えた時に、今は千年に一度、あるかないかのチャンス」

水島「うん」

石田「これがタイムリミットがある訳ですよ」

水島「うん」

石田「第1段階のタイムリミットが1月の20日」

水島「うん」

石田「要はトランプが就任する前までの間に、とにかく行けるところまで行っちゃって既成事実を作っておきたい」

水島「うん」

石田「既成事実を出来るだけ多く作っておけば、今度、トランプとの停戦交渉の時に出来るだけ多くの有利なカードを持った状態でネタニヤフは臨むことになるので、領土問題に関しては、ある程度、今のイスラエルじゃなくて、もっとゴラン高原も実効支配しちやっっている感じですけど、国際社会に認められてないけどね」

水島「うん」

石田「でもイスラエルは大分前に、一方的に併合しちゃっている訳ですよ」

水島「うん」

石田「同じようにヨルダン川西岸とかゴラン高原とか、更には、その先の出来ればユーフラテス川の手前ぐらい迄、ダマスカスも含めて」

水島「うん」

石田「一旦、シリアを占領して、イスラエル人を引っ越しさせて、既成事実を作っておきたいと。このヨルダン川西岸地区だって、一応、国際社会ではパレスチナって国になっていますけど、でも、あそこは8割がたイスラエルですからね」

水島「みたいですね、何か」

石田「最早ね」

水島「はい」

シュラー「うんうん」

石田「同じような状況を作ろうとしているんだと思います。その状況をつくるには今、本当に凄いチャンスで、とにかく大イスラエルに一步でも二歩でも近づけるっていうね。そこが、まず当面の彼らの目標なんじゃないかなあと思うんですね」

水島「なるほどね」

石田「うん」

水島「全くその通りだと思うんですね。ということで我々が前に言っている、バイデンさんも一時、言ったことがあるけど、ガザでの虐殺っていうのかな」

石田「うん」

水島「4万6千人だかね。もう殺しちゃっているんだけど、軍事援助をやめるって言えば、イスラエルは止まっちゃうんですね」

石田「そうですね」

水島「経済も軍事も目いっぱい、やっているから、もう疲弊しているから」

石田「アメリカは送り続けているじゃないですか」

水島「そうですね」

石田「イスラエルに爆弾とか兵器とかをね」

水島「はい」

石田「うん。それは、やっぱり、さっきも話が出ていたけど、アメリカの上にユダヤ資本っていう、その上下関係があるんですよね」

水島「うん、そうですね」

石田「ユダヤ系の資本がアメリカの政治家に沢山、お金、寄付しているから」

水島「そうですね」

石田「だから、お金で買われているバイデン政権があって、その下に、更に日本の自民党が居てね」

水島「うん」

石田「日本のマスコミも居るみたいな、そういうコバンザメになっちゃっている訳ですよ」

シュラー「うんうん、うんうん」

石田「水島社長、ちょっと面白い話があって、今のネタニヤフ政権はリクードっていう政党ですけど、リクードはテロリストであるっていうのを、実は1948年に物理学者のアルベルト・アインシュタインが…」

水島「相対性理論のね」

石田「そう相対性理論の。あの方がニューヨーク・ポストに公開書簡で投稿しているんですよ」

水島「ほお〜…」

石田「アインシュタインもユダヤ人ですね」

水島「そうですね」

石田「ユダヤ系のドイツ人ですけど、彼がニューヨーク・ポストに投函した内容っていうのが、リクードの前身、要は設立母体になっている政党というのは、ヨルダンとか当時のパレスチナの戦争と全く関係ない小さな村に入って、いきなり大虐殺をやったユダヤ系のテロリストが居るんですよ」

水島「うん」

シュラー「うんうん」

石田「そのデイル・ヤシーン村虐殺 (Deir Yassin massacre) という事件ですけど、これ、ウィキペディアとかにも載っているんですけどね、相当、酷い、もう目も当てられない虐殺事件で、ユダヤ系のテロリストがアラブ人を皆殺しにしたっていうね、そのデイル・ヤシーン虐殺を行った実行犯とか、彼らをサポートしていた人達が設立メンバーとなって、ある政党が出来たんですよ」

水島「うん」

石田「その政党が、今のリクードの前身ですね」

水島「ああ〜」

石田「だから、こいつらが創った政党は遅かれ早かれ、もっと更に酷い大虐殺事件を起こすだろうということをアインシュタインがニューヨーク・ポストに投稿しているんですよ」

水島「ああ～そういう歴史があるんだ」

石田「これ、1948年の段階で、そういうような内容が投稿されて、その記事を基にして、現在の物理学者とか数学者達がアインシュタインは、実は、今の状態を予見していたと」

水島「うん」

石田「我々物理学者、数学者の団体は、この政権に協力をしている西側諸国との協力は一切やめるっていう、そういった書簡を、この間、出したんですよ」

水島「なるほどね」

石田「だから、今のアメリカが相当、孤立化をしているという状態になっていて、世界が段々、包囲網的になっているというね。これは国家的レベルじゃなくて、例えば、色んな物理学者団体とかね、そういう組織そのものが、例えばイスラム協力機構とかね、色んな組織がイスラエルとアメリカの今、やっている、もう本当にアメリカなんかダブルスタンダードじゃないですか」

水島「うん」

シュラー「うんうん」

石田「そういうところに本当に厳しい非難声明を出していて、世界は何が正しいのかっていうのが段々判り始めているんですよ」

水島「そこは凄く大事な点ですねえ、はい」

石田「うん」

シュラー「この前の選挙で、アメリカで本当にアラブ系の方が凄く立ち上がりましたよ。これは前から初めてですよ。特にミシガン州。アメリカのミシガン州でデトロイトの近くに車工場の労働者。いっぱい、アラブ系が居るんですよ。本当に、この前、影響になって、未だパレスチナの反対、一応、アンティファ、組んでいるけれど、えーと、そうですね、数週間前にも、大きなデモもあったんですよ」

一同「うん」

シュラー「それもトランプの反対でも、活動するけれど、イスラエル支持の反対もしますから、未だそっちの方も一つの混乱なところで出ます」

用田「シリアの今の指導者。あれもテロリストだってね」

石田「ああ、そうです」

用田「指定しているのに、基本的にアメリカも接触して…」

石田「そうですね」

用田「基本的にやろうと、或いは…」

水島「あれは解放機構ってやつですね」

用田「アゾフもそうですね」

水島「はい」

用田「アゾフも」

石田「ああ、そうです」

用田「アメリカが指定して、予算も入れないようにしたのに」

水島「うん」

用田「最近、こそっと解除しているんですね」

石田「そう」

水島「そうですね。もう、しっかり（失笑）」

石田「だからね、そうなんですよ。用田さん、おっしゃる通り」

用田「全部、二重基準？」

石田「そう。アメリカはね、シャーム解放機構もアゾフも、あとハマスもフーシ派も、もう全部、テロリスト認定しているんだよ。でも、それ以上のテロリストは、実は第6次ネタニヤフ内閣なんですよ」

シュラー「うん」

石田「物凄い何倍もの力を持ったテロリスト。金も持っているし武器も持っているし、思想も相当、悪魔思想です」

シュラー「うんうん」

石田「あくまでもイスラエルがじゃないですよ。第6次ネタニヤフ内閣が相当、ヤバい思想のテロリストだけでも、彼らのことはテロリストとは一切言わず、もう、むしろ爆弾とか、武器とか、どんどん支援しているっていうね」

用田「先程、最初に申し上げたように、一番のならず者国家っていうのは誰だっていう話ですよ（苦笑）」

シュラー「うん」

富岡「ネタニヤフは戦後生まれですよ」

石田「はい、戦後生まれですね」

富岡「そうですね。だから、結局、ユダヤ国家のね、まあ、その前はホロコーストとか、色々歴史があって近代シオニズム運動があって、その聖書とシオニズムの連関とかあって、それで歴史上、色々あったけど、何かそういうものから何処かで切れて…」

石田「そうです、そうです」

富岡「切れているようなところがネタニヤフの中にあるって」

石田「そうです。おっしゃる通り」

富岡「だから、そこが凄く重要な問題だと思うんですよ」

一同「うん」

富岡「だからユダヤ教の本当の正統派っていうのは、所謂、大イスラエル主義は執らないし、やっぱり別な考え方を持っている」

水島「そうですね」

富岡「だから、やっぱりネタニヤフっていうのは非常に特殊な…」

石田「うん」

富岡「何か異常な…」

石田「そうです。だから前の第5次内閣は割とマイルドだったんですよね」

富岡「うんうん」

石田「考え方がマイルドで、アブラハム合意というのもトランプさんと話をしているし…」

富岡「はい、はい、やって来た訳ですね」

水島「ありましたね」

石田「だから第6次、今の内閣、要はネタニヤフの首根っこを掴んでいる3人のシオニストが居ます」

富岡「ああ」

石田「財務大臣と国家安全保障大臣と法務大臣」

シュラー「ああ、シオニスト、シオニスト」

石田「うん。その3人が入植地出身のユダヤ教のユダヤのテロリストを弁護していた弁護士ですよ」

富岡「ああ、はい」

石田「その3人の共通点ですね。彼らをサポートしているのは、ゴラン高原とかウェストバンクの入植地出身の第2世代って言われていて…」

富岡「第2世代。なるほどね」

シュラー「うん」

石田「もう70年以上、ずう〜っとヨルダン川西岸で入植活動しているんで、そこに引っ越して来たイスラエル人が結婚して、子供が生まれるじゃないですか。生まれた子供の世代な訳ですよ」

富岡「ああああ、なるほどね」

石田「だから彼らからしてみれば、生まれ育ったのがヨルダン川西岸なので、何故、それをアラブ人に返す必要があるんだと、そもそも、そういう思想を持ちちゃっているんですね」

水島「なるほどね」

富岡「だから本来の宗教的シオニズムとは、ちょっとズレた…」

石田「いや、違いますねえ」

富岡「違うんですよね」

石田「違うんですよ」

富岡「だから非常に悪しき…」

石田「そう。おっしゃる通り」

富岡「何と言うか、近代主義的な領土感覚っていう感じですよ」

石田「そうです」

富岡「それね」

石田「だから多くのユダヤ人は、パレスチナ人とも仲良くやりたいと。彼らを雇用して工場
で働かせて、労働力を支えて貰っているから仲良くやらないと、そもそも仕事にならないっ
ていうのも…」

富岡「そうですね」

石田「ユダヤ人の」

富岡「聖書的にはイサックとイシマエルっていうね、過程が源流としては、本来はある訳だ
から」

水島「神様として一緒でしょ」

石田「神様、一緒です」

水島「ね」

石田「だから、そのアブラハムっていう共通の神で、名前をつけて」

富岡「だから本来のそういうユダヤ教であれば、今の様なネタニヤフ政権っていうのは、絶
対、あり得ないはずですよ」

石田「あり得ないです」

富岡「ああいう残虐主義っていうか。リクードはね…」

水島「どうですか、その原理主義っていうのがイスラムにあるようにね、やっぱり、彼らは、
ユダヤ教とタルムードの原理主義的な解釈をして、大イスラエル構想みたいなのをね…」

富岡「うん、だから、それは一つの解釈を強引にやっているっていうんです」

水島「うん」

富岡「占領する為の解釈っていう、そういうところは出て来ると思います」

石田「そうですね」

水島「この間、ユダヤ教の学者さんと言うか研究者に出演して戴いて、典型的な一つエゼキエル書（Book of Ezekiel）だったかな」

富岡「はい、はい」

水島「その中の文章を引用して『モーゼは、こう言った』と。『周りを見回したら誰も居なかった。だから石で人間を石で殺した』と。『周りを見回したら未だ居ないから地中に埋めた』」

富岡「うんうん」

水島「こういう感覚のね、つまり異教徒に対する厳しい表現があるんでね」

富岡「それはありますよね」

水島「異教徒は殺してもいい。異教徒はレイプしてもいいっていうね、こういう表現も凄くあって、実は、私は新約聖書から入ったから、旧約もそういう流れだと思って見ていたけど、実は旧約は大分、違うところがね」

富岡「それは当然、ありますね」

水島「えーと、やっぱり、そのところがね…」

富岡「ただ旧約の解釈をね、やっぱり非常に近代国家的な、或いは、近代の領土感覚とか、拡張主義とかっていう、やっぱり、そこで解釈しちゃっているところが問題で非常にあると思うんですよね。リクードも、多くは、そういう典型的なあれだと思う」

水島「そういうところあるでしょ」

富岡「丁度、2001年だったかなあ、私、イスラエルに居たんですよ」

石田「うん」

富岡「その時、シャロンっていう…」

石田「はい。アリエル・シャロン首相」

富岡「あれはリクードで、イスラムのドームに入って来て、それで第2次インティファダが起こる」

石田「ああ、岩のドームの」

富岡「そうですね」

石田「ねえ、聖地でね」

富岡「丁度、その時期。だから常に、そういう…」

石田「強硬な」

富岡「リクードは、そういう強硬なことをやってきて」

石田「そうそう、そう」

富岡「だから、そこはあると思います」

石田「そうそう、そう。さっき言っていたね、デイル・ヤシーン虐殺っていうのは、あれは、その当時、ダヴィド・ベン・ベン＝グリオン (David Ben-Gurion)」

富岡「はいはい」

石田「首相がね、謝罪しているんですよ」

富岡「ああああ」

石田「ヨルダンの国王に対して、イスラエルが悪かったです、申し訳ございませんって謝罪をしているんだけど、その当のテロリスト達は謝罪どころか、俺達は英雄なんだと」

富岡「ああ、ああ、なるほどね」

石田「もう凄い事を行ったから俺達は強いんだぞと、世界中の外国の特派員を呼んで、その虐殺の現場に、どんどん写真を撮って世界中に発信してくれと。何かそれが物凄く誇らしげにね」

水島「ああ～」

石田「何か、そういうことをやったっていうのが凄い問題になって、その時に沢山のパレスチナ難民が、ぶわあ～と何十万単位で出たんですよ。もう自分達の身の危機を感じてね」

水島「ああ、危ないって言ってね。だから、その問題で言うと、我々が見とかなきゃいけないのは今、ネタニヤフ政権がずうっとやっているでしょう。もうバイデン政権の援助があるから出来るんでね、つまり、今、言った様に過激な人達だっていうのは解るけども、それを支えているバイデン政権は、ずうっと軍事的にも経済的にも応援して来た。やはり、現実には、やっぱり見なきゃいけないなあと。

そこが、やっぱり怖いところでね、もう一つ、私も、皆さんも知らないと思うけど、一神教と思っているけど、あれは、よく見ると違うっていうね。ユダヤ人にとっては、ヤハウエ (YHVH) の神様は唯一。だけど他の何人、ペリシテ人とか何人とか、こういう人達は、それぞれ神を持っているって言うから、実際は多神教ですよ。

でも俺達の民族に関しては、選ばれたのが唯一、ヤハウエ。だから新約聖書の世界の全ての創造主というイメージとは違ったので、私は読み直してビックリしたんですけどね。はい」

富岡「あ、宇山さんが手を挙げていらっしゃるよ」

宇山「いいですか、宜しいでしょうか」

水島「宇山さん、どうぞ」

宇山「はい。先程、石田さんと富岡先生がリクード (Likud) の前身のことについて詳しい話をされておられたんですけども、そのリクードの前身となるテロ組織がイルグンという組織ですね。このイルグンで過激派テロを行っていたリーダー、幹部のお子様が、今の駐日大使のラード・エマニュエル氏ですよ」

一同「おお～」

宇山「だから、そのエマニュエル総督という人は、本当にイルグンの過激メンバーのリクードとも歴史的に直接、繋がるような…」

石田「マジか」

水島「凄い話だねえ」

宇山「まあ、そういう人であると。そして、この日本にも影響力を持っているということだろうと思うんですね」

水島「いやいや、いや、いや、そうだよ」

宇山「それからね」

水島「うん」

宇山「先程、社長が非常に重要なファクターをご指摘下さった、トルコの要素ですね」

水島「はい」

宇山「これは今後、重要な中東のプレイヤーになってくるんだろーと思います。ちょっと、このシリアのグチャグチャの調整を、先程、石田さんからご説明戴いたんですが、私から、もうちょっと補足、整理をさせて戴きますとね、アサド政権というのが、まず、第一にありましたね。このバックについているのがイランとロシアだったんですが、これが、まず第一ですね。もう一つは反政府勢力、HTSですね」

水島「うん」

宇山「この背後に居るのがトルコとされている訳です。これが第二ですね。もう一つは、勢力があるんですよ。この第三がクルド人勢力ということになる訳ですけども、クルド人勢力のバックに居るのが、アメリカと、そしてイスラエルと言われているという状況です。

今迄でシリアというのは、ロシアとトルコの勢力圏の代理戦争の部隊という形で、歴史的に推移して来たんですけども、それでも2020年にロシアとトルコは、このシリアに関して、協定を結んで両勢力の直接衝突を避けようということ、一旦、合意をしている訳です。それ程、ロシアとトルコの歴史的な駆け引きとなって来た場所です」

水島「うん」

宇山「近年、ですね、ロシアにとって、このシリアというのは、どういう、そもそもの意味があるかと言うと、実は、私はね、殆ど、もうロシアにとって、意味は無くなっているのではないかなと思うんですよ」

水島「うん、うん」

宇山「今迄は、ロシアにとってシリアは、アメリカの中東に対する影響力の浸透に対して、カウンターをしていくというものだったんですよ」

水島「うん」

宇山「アメリカが中東政策を色々動かしていく為に、それに対して反対をするような、ひとつのレバレッジとして、ロシアがシリアというカードを使っていたということがあったと思うんですけどね、まあ、そのアメリカも近年、この中東から手を引いている訳です」

水島「うん」

宇山「それに併せて、ロシアにとって、この中東カード、シリア・カードというのが、大きなレバレッジではなくなってきているという部分があると思うんです」

水島「うん」

宇山「トランプ大統領が、実際、このシリアには一切、関わらないと、あれは、もう全然、自分達とは関係の無い国の出来事だという言い方をしておりますけれどもね、そういうことも考え合わせて、最早、ロシアがアサド政権を守らなければならないという理由も、利便性も無くなっていったというような政治力学が、背景にあったのではないかという様に思います」

水島「なるほど」

宇山「そこで、新たにプレイヤーとして登場してくるのが、このシャーム解放機構と、そのバックに居るトルコというところ。トルコが、どれだけ上手くシリアをコントロールしながら、イスラエルを牽制していくことが出来るかという、私はお手並み拝見だと考えているんですね」

水島「なるほど。もう一つ、どうですか。所謂、オスマン帝国っていうのは、ずうっとね、実はイギリスが色々イラクだ、シリアだ、やる前に、あのオスマン帝国が支配していた、第一次世界大戦を経ながら全部、取られちゃったと」

シュラー「うん」

水島「だから、エルドアンはオスマン帝国の復活を凄く望んでいるっていうことを聞いたことがあるけれどね」

シュラー「望んでいる」

水島「その意味ではトルコって、領土的な意味でのイスラム圏に対する支配力というのを狙っているっていうことがあるんですかね」

シュラー「あるかもしれない。今、話した時、もうトルコは自分でシリア北部も取ろうと考えているから、それも始まりじゃないかなってエルドアンは考えているということがあるし」

水島「なるほどね」

シュラー「もう日本人もね、私はアメリカ生まれ育ちだから、本当にキリスト教の中の変化が凄いですよ」

水島「うん」

シュラー「私の宗派は正しい」

水島「うん」

シュラー「他の宗派も駄目です。その存在でも許さない。と言うか、貴方の命も取っちゃう。本当に、そこまでいくんですよ」

水島「厳しいですよね」

シュラー「だから、私もアメリカのこれからの混乱で言うと、その宗教のところも入って来ますよ」

水島「そうですねえ」

シュラー「特に、今、強いのが福音派。オーケー、私は一応、洗礼されているのはルーテル教、でも子供の時は別に教会へ行っていないとか何かね。今、何を信じているかは、それは自分の個人ですけど。でもね、福音派で、ルーテル派で、キリスト教ではない」

水島「う〜ん」

シュラー「ジェイソン・モーガンさんも結構、熱心なカソリックだけど、カソリックもキリスト教ではない。福音派で再び洗礼されないと、貴方はクリスチャンではない」

水島「うん」

シュラー「認めない」

水島「っていう訳ですね」

シュラー「本当にイスラエルの方で仲いい。何故なら、彼らの考え方は、イエス様、戻る為に、聖書に書いている通り、よく読んでいないけれど、何かユダヤ人達も神様で、殺さなければ、最後の戦争でアルマゲドンとか何か…」

水島「選ばれた人だから、そこを大事にしないと駄目だっていうね」

シュラー「そう。それで福音派は、そこまでも大事にしますよ。いや、本当に宗教が入って来ると、本当に狂っていますよ」

水島「そうですね」

富岡「福音派は、特にラジカルですよね」

シュラー「Radical よ」

富岡「そう凄く。そこは問題で」

水島「うん、それがトランプのね」

富岡「実はトランプ自身は改革派ですよ。カルヴァン派ですね」

水島「トランプを支持している中心は福音派だって言ってね」

富岡「そうそう。ただね、トランプ自身はカルヴァン派で改革派ですよ、これは一種の予定論なんですけど、逆に自分が神に選ばれているっていうね」

シュラー「うん」

富岡「自分がその為に今、居るんだっていうのがね、これが、あの改革派。僕の教会も改革

派ですけど、トランプは、特にそれが強いから、銃撃されたあとね、こういう拳をあげてね」

シュラー「そう。これ、これ」

富岡「私は神に選ばれて生きているんだっていうね」

水島「うん。だから死なないって」

富岡「それが凄く強いですよ」

シュラー「もう一つ、写真があって、国旗が上にあってね」

富岡「そうそう、そうそう」

シュラー「一応、天使みたい（笑）」

富岡「そうそう、そう（笑）」

シュラー「形を変えて」

富岡「だから、彼は典型的な改革派の信仰を、正に自分は体現しているんだっていうところがありますね」

水島「なるほどね。今言った、そういう厳しさね。よく分からないのは、エマニュエルさん、さっき、ちょっと出ましたけどね、凄くビックリしたんだけどね」

富岡「ビックリする」

シュラー「うん」

水島「これ、あのう…」

石田「居るんだね」

富岡「居るんですね」

水島「ねえ」

シュラー「ね」

水島「というのは旧約聖書っていうかね、聖書の中にはソドムとゴモラの話があるじゃないですか」

富岡「ありますよね」

水島「こういう同性愛なんかにふける奴は許さないっていうね」

富岡「うんうん」

水島「熱線で、みんな、焼き殺した」

富岡「そうそう」

水島「神の怒りでね。そういう表現があるにも拘らず、この辺は、みんな、物凄く今、なっているからね（苦笑）」

富岡「うん…」

水島「それと、やっぱり…」

富岡「いや、だから、当然、トランプは、そういうことに対して揺り戻しっていうか、LGBTとかはあれだと思いますよ」

水島「いや、それと終末論で言うと、中世はそういうのが結構、あったじゃないですか。で、これは西尾さんだったか誰だったか、ちょっと記憶ないけど、中世に戻りつつあるっていうかね」

富岡「うん。そういうところはありますね」

水島「つまり戦闘は十字軍で、異教徒はみんなやっつける。LGBTみたいなね。もう、逆の意味ですけど、自分と価値観が違う奴は許さないっていうね。こういう流れの中で今、進んでいることを見ると、我々の考えているキリスト教っていうのは、まあ、私も少し学んだつもりだけど、もうちょっと大らかだったはずだけでもね」

富岡「うん」

水島「ただ物凄く厳しい原理主義的な…」

シュラー「いや、私、怖いよ」

水島「ねえ」

シュラー「本当に怖いです。それで、例えば、これからアメリカの中部の町とか、儀式でゲイの人を死刑にさせるとか何か出るかもしれない。本当に、わあ～、そこまでいくと、私も、とんでもないけれどもね」

水島「うん。だから、そういう意味で言うとねえ…」

富岡「まあ、アメリカは元々ヨーロッパから来て、結局、地上に神の国を、千年王国を創ろうっていうね」

水島「そうですね。新世界を創るっていうんでね」

富岡「だから、これは本来の聖書とかキリスト教から言うと、そうすると、非常にひっくり返った考えで、人間の力で神の国を地上に創ろうっていうね」

水島「うん。そうですね」

富岡「これは、ある意味、ソビエトもそうですよ」

水島「うん」

富岡「ある意味ね。だから、要するにプロレタリア・メシアニズムっていうやつですから」

水島「うん。それにプロレタリアートの」

富岡「人間の力でメシアの国、共産主義っていう絶対善の国を創ろうっていう、だから米ソっていうのは、ある意味、ひっくり返ったキリスト教信仰の戦いなんですよ」

石田「ああ～北極と南極みたいなもんですよね」

富岡「そうなんですよ」

石田「全く対極にあって…」

富岡「そう、だから、僕がさっき言った人神ですよ。人が神になって、絶対に王国を創って世界を平和にしてやろうっていう、とんでもない、ある意味、ひっくり返った倒錯的なね」

水島「でもね、これ、ある意味、今、言ってくれた…」

用田「その観点から行くと、プーチンとトランプはどうなんですか」

富岡「プーチンとトランプは、そういう意味では、ちょっと冷静なんじゃないですか」

用田「ああ」

富岡「ある意味」

シュラー「うんうん」

用田「こっちは、ロシア正教…」

富岡「うん。プーチンは、ある意味、そういう形での、何かパクスとして平定しようっていうのは無いと思います。むしろ、ロシア正教の正統っていうか、普通のって言うか、むしろ、そこの方が強い気がします。何か宗教を使って覇権をやろうとかっていう、ちょっと、そうじゃなくて…」

用田「元々ロシア自体が多民族ですもんね」

富岡「そうですね」

用田「そもそもね」

富岡「だから、やっぱり守るっていう、その緩衝地帯が絶対に必要でっていう。だから今度のNATOの東部進出とかマイダン革命っていうのは、ロシアにとって、プーチンにとっては物凄い危機である訳ですよ」

用田「なるほど」

石田「だから、リアリストですよ」

富岡「リアリスト」

石田「プーチンさんは現実のことを考えている」

富岡「そう」

石田「何が一番、いいのかっていうようなね」

富岡「そうですね」

水島「今回の場合、プーチンの姿勢を見ていると解るように、トランプと共通しているのは、自前で全部、やれる国っていうね。ロシアもアメリカもエネルギーも食糧も何も全部、やれ

る。だから余計なものが入って来ない方がいいっていうのと、そういう世界を一つずつ持っているユーラシア構想のロシアとアメリカのね、もう一回、自分が新世界であろうとするのと、だから他の群小の我々みたいな国民国家群というか、こういう人達は不完全な国だから何とか纏まろうとか色々あるけれども、だから、石破さん、そこから脱しないと、こういう人達は、もう自前で出来るから独自の強化をしていくっていうね。

こういう世の流れになるということに気が付かなきゃいけないのと、面白かったのは、ある人から連絡を貰って分かったんですけど、トランプさんが聖書売り出したじゃないですか。何の聖書だと思っていたら、メイフラワー号で来た人達が持っていた聖書だそうですよ。福音派の聖書でも、よく一方的に流れている聖書じゃなくて、昔、上陸したその聖書だったそうだから、トランプさんが何をやりたがっているかっていうのは、今、富岡さんが言った通り…」

富岡「だから一方でディーラーとしての感覚と、一方でそういう宗教的敬虔さって言うものと、結構、両方あるから、非常にどういう風に出て来るかっていうのは…」

用田「私は、そのメイフラワーの聖書を持って来たのは、よく知らないんですけども、それは千年王国を…」

水島「まあ、新世界ですね」

用田「アメリカに新世界を」

水島「そういうことですね」

富岡「そういう意識が凄いですよ」

用田「要はニューワールド・オーダーですね（笑）」

富岡「そうなんです」

用田「それを創ろうというのが、アメリカで一旦…」

富岡「それが凄く強かったと思いますよ」

用田「その中で、我々は選ばれた国民だと」

富岡「選ばれたっていうのはあると思います」

水島「だから、変な話だけど、異教徒というか、異系な奴は、もう入るなというね。充分、やっていけるんだっていうことでしょう。みんな、それぞれ、やればいいんだっていうね。ただ、我々は持ってないから困りますよね」

荒木「だから、そういう原理主義的な感覚とか、今、シュラーさんが言われたようなお話って、日本人は、どんなにやったら理解できないでしょう」

一同「うん」

シュラー「理解しない、日本人って、よく仲良くって考えるけど、でも向こうは仲良くじゃなくて、貴方は、私の考えに改宗しないと（首切りの仕草）そう。本当にそう」

水島「いや、これねえ、これも、また面白いのは、ダーウィンの進化論って、適者生存じゃ

ないですか。強くて環境にあった奴が生き残っていった。でも京都大学の、何でしたか…」

富岡「今西錦司。今西さん」

水島「今西理論はね…」

富岡「今西進化論」

水島「共生なんですよ」

富岡「共生なんです」

水島「霊長類、ゴリラの研究をして、進化っていうのは、そんな適者生存で生き残るんじゃないなくて、ゴリラを見ていると、みんなで共生、助け合って生きている。だからダーウィン系の適者生存っていう進化論を否定したんですね」

富岡「和。和の進化論ですよ」

水島「そうそう。だから、ちょっと、それは面白い」

富岡「凄く面白い」

水島「面白い、でも…」

富岡「凄く学問的でもある」

水島「そう」

富岡「凄く面白いです」

水島「物凄く面白いね。日本の縄文時代の在り方、そういうもの自体も、みんな、そういうものを持っているっていうねえ。だから、そこら辺は、我々が自信を持ってもいいんじゃないかっていう気がしますけどもね（笑）」

富岡「ただ、まあ、核武装した方がいいですよ」

一同「(笑)」

水島「そういうことです。それはもう説得がいりますけどね。それで、先程、言った様に、用田さんに背景の問題をちょっとね…」

用田「ああ、アメリカ…」

水島「うん。アメリカ、これからのことを」

用田「そうですね」

水島「まあ、あまり時間も無いですけども、一応、皆さんにも、お話し戴きたいと思います」

用田「時間も無いので、とっととやりますが、やっぱり、もう一回、私も考え直して、やっぱりアメリカの大陸的なものの考え方と、中国の大陸的なものの考え方と、日本みたいに適度な海に囲まれた日本と安全保障の感覚は多分、違う。それがミヤシャイマーだとかジェフェリー・サックスだとか出て来ている言葉だと思いますね」

水島「うん。そうですね。地政学からですね」

用田「それは、やっぱり素直に見ていかなきゃいけないので、その前に一つあるのは、連綿と国家を超えた戦争のシナリオ。これは社長もよくお解りだと思っんですけども、太平洋問題調査会っていうものがあるって、日本は戦争に追い込まれて、外交問題評議会とソ連の包囲をやって、そして問題なのはイギリスですよ。英王立国際問題研究所」

水島「はい」

用田「アングロ、アメリカによる第一次大戦後の世界秩序を統治する目的で設立したと。だからウクライナ戦争も全部、イギリスが操っているのが今回、よく解りました」

水島「イギリスはTPPに入りましたね」

用田「ああ、もう入ったのは、日本が危険ですね」

水島「はい」

用田「それで大西洋評議会と。ソ連の包囲網の時には外交問題評議会が先陣を切ったんですけど、今回、バイデンになって先陣を切ったのは大西洋評議会。これが下の方だけ言いますけども、外交問題評議会と大西洋評議会、大西洋評議会は下の方にあるんですけど、これは、明確にアジアに於ける次の戦争のグランド・デザインと」

水島「うん」

用田「だから煽られた部分が、よくあるということ、我々は頭に置きながら、しかし中国の脅威と、どう向かい合うかということを考えなきゃいけない。難しいですよ」

水島「うん」

用田「大西洋評議会が言ったのは、対中国戦略の明確化。習一族、習近平ですね。習近平を倒せ。これは中共を倒せとは全く違うんですよ。習近平を倒して新しい中共で、言うことを聞く中共で上手くやっていきましょうというのが根底にあるんですよ」

水島「うん」

用田「これ、バイデンがそう言っていた。ところがトランプは中共を倒せと言っているけども、果たして何処までやるかっていうのは不明です。レッドラインの厳格化で、台湾と尖閣というのは、ここで来ている訳です。台湾。それを追いかけて行ったのが、外交問題評議会が同じ2021年1月に台湾と同時に北朝鮮に於いて米中が紛争を起こす可能性が高いと。何故、北朝鮮かなと思ったら、今回の流れが繋がるのかもしれない」

水島「そういうことですね」

用田「朝鮮半島を不安定化してやるという話はあるかもしれん。台湾、台湾、台湾と出て来るんですよ。だから、ここは、よく気をつけなきゃいかんのは、私は決して台湾のことを、ないがしろにするつもりはないけれども、台湾有事は日本の有事と、私は7～8年前に台湾に行った時に、論文を書いたんです。私は、そのあと色々な人が言っているんだろうという風に認識しているんだけど、それを言ったのは台湾の防衛を優先にしてやるっていうんじゃないんです。台湾を守る為に議論をする上で、日本は何も出来ない」と

水島「うん」

用田「自衛隊で何の戦力も無くて使える法律も無くて、そんな状況の日本で一体、何が出来るんだと。そういう質問を受ける訳です。日本は一体、何が出来るのと」

水島「うん」

用田「その時に何も答えられないですよ。それが悔しかったので『台湾有事は日本有事』と書いた。まず、日本のことをしっかりやれというつもりで書いたのが今、しっかりと台湾のことをやれという風にすり替わっているんですよ」

水島「うん」

用田「そうじゃないんですよ。所謂、米中の扇動に乗らず真の脅威を見極めなきゃいけないというのが非常に難しいところで、この下の緑のところですね。グローバリストは日本に対して常にこう言います。グローバリストは3つのことを言います。対露包囲網を諦めずに、NATOと日韓を連携しろと」

水島「うん」

用田「先程、申し上げたようにNATOは、もう破れ傘なんですよ。破れ傘なのに、これをするのは別な意図があるからです。いや、軍事力、指揮系統を一本化したい。それから中国脅威を煽って戦争ビジネス。欧米と中国は共存ですね」

水島「うん。そうです」

用田「やっていることは、必ずEUの委員長だとか首相、大統領が替わったら真っ先に中国詣じゃないですか」

水島「うん。ドイツも、みんな、そうですね」

用田「ええ。言っている事とやっている事が真逆ですよ」

水島「うん」

用田「それから日独から技術、金、収奪して日本の核と国防軍は認めませんよと」

水島「うん」

用田「こういう世界で来ている訳ですね。じゃあ、無駄ですよ。ここは未だ来年、ぶれるかもしれませんが、トランプはとうすると。ここは真剣に問い詰めていかなきゃいけない」

水島「うん」

用田「トランプはアメリカの伝統回帰とMAGAで一気に走るには走るんですが、先程から話がありましたように、アメリカの国内は非常に二分化しているのは間違いないんだと思いますね」

水島「うん」

用田「だからディープステートのとの戦いはこれからですね」

水島「うん」

用田「だから国内では相当、エネルギーを消耗する。それは何かと言うと、外を向いてる暇が無いと。戦争をしないことを公約としたトランプというのは有難いんですけども、これは、中国、ロシア、北朝鮮と戦争せずに平和路線を追求する可能性はある。特にロシアとは関係修復してしまったら、日本はどうするのと、こういう話ですよ。

先程、話がありましたように、北朝鮮はどうするのと。ロシアと調整して朝鮮半島から米軍が撤退をするというところまで、日本は視野に置いておかないといかんと」

水島「うん」

用田「まあ、力が弱くなった韓半島からですね。アメリカは何も不思議なことはしていない。伝統的な中立、不介入主義へ回帰をした。先程から、ずっとありますように、やっぱりアメリカはアメリカに戻っていると。トランプは『強く主権を持った独立国を支援する』、この言葉に日本は、しっかりと録音せないかん訳ですね、前から言っている様に。日本は独立国では無いと。グローバリストに染められた敵国だと」

水島「うん」

用田「石破君、何しに行くのと、こういう世界ですね（微笑）」

水島「うん」

用田「軍事的に広大な太平洋というのは、ここに画を描いています。ここはアメリカに行つて議論を色々すると、必ず齟齬が出るんです。日米の作戦戦略の環境認識は違います」

水島「うん」

用田「もう、ずうっと、それを感じてきました。でも、それを何とかくっつけようとしてきましたが、くっつかないんだというのが、ようやく、この2～3年、バイデン政権になって解ったことですね。それでロシアと中国、北朝鮮、今、くっついている訳ですから、これは三国のA2/A Dという大きなミサイルも潜水艦だとか、所謂、中国を単独でやっていたよりも強力になっているんですよ」

水島「うん」

用田「アメリカは、中国だけの時でも太平洋を渡って第一列島線に展開するなんていうのは、至難の業だと」

水島「うん」

用田「ましてや中国本土を叩いたら、中国は何をするか判らるので、核兵器を使わないと。2015年、伊藤貫さんにワシントンで会ったんですけど、その時、彼が言っていました。それは基本的にももの考え方が違うんですね。今、ミヤシャイマーとかジェフェリー・サクソンが言っているのは、太平洋と核による本土防衛。要するに、これで中国は直接、アメリカと戦うといった馬鹿なことはしないんだという認識が、根本にあるんですね」

水島「うん」

用田「そして二つ、問題があるのは、この第一列島線、赤、それと青の第二列島線の、もっと奥でオーストラリア。だから前方展開というのは、非常に不経済で危ないと。何故かと言うと海軍、アメリカは海軍国ですね」

水島「うん」

用田「海軍が戦えないんですよ。やっぱり、全部、やられちゃうんです。対艦ミサイルとかミサイルで沈められる。それから電磁波とか、そういうのを喰らって沈むのは、もう目に見えているんです。だからピート・ヘグセス（Peter Brian Hegseth）が今度、アメリカの国防大臣になる」

水島「うん」

用田「何回、台湾とのシミュレーションをやっても、何回も、全部、負けると言ったじゃないですか。あれ、本音ですよ。負けないようなことを言っているけども、基本的には負けることが判っておるんです」

シュラー「うん」

用田「アメリカの前方展開は困難。それは当たり前です。アメリカ海軍の戦いは出来ないの、第1列島線は使うだけ使って下がるという。陸上自衛隊、自衛隊で言うと前進陣地。ある程度まで使えるけど最後まででは頑張れないと」

水島「うん」

シュラー「うん」

用田「そこまでは使い切るとというのが前進陣地です。日本は前進陣地です。もう、ずうっと、それはそうです。第1列島線」

水島「戦場ですよ」

用田「戦場。はい。戦場です。これでやるのは基本的に多分、トランプは変えるだろうと思います。第1列島線で戦うという方針を、恐らく変えると思うんです。それは、もう一つは、AUKUSと言ってオーストラリアのラインがありまして、今、いっています。これは基本的にアングロサクソンの同盟ですけども、日本に入れというのは、とんでもない話ですけどね、でも、それは後退戦略です。オフショア・コントロールと言って、そういうものの考え方は前々からあるんです。

2015年に議論した時には、前方展開の戦略の話とオフショアの戦略の話と両方して、後退戦略なんかやったら日米安保条約が壊れるよおなんて言ったんですけども、しかしアメリカの海軍の力を最大限発揮するためには、やっぱり、オーストラリアとかミッドウェイだとか、ハワイとかですよ」

水島「うん」

用田「アメリカ海軍も捨てたもんじゃなくて、この辺で戦うと基本的には勝てる可能性はある。ということは、前に出て戦う可能性が無ければ、後ろでやるのはどうにもならん」

水島「当たり前ですからね」

用田「戦略上の合理的で、更には太平洋と核によって本土防衛が出来ているんだから、何で中国はアメリカと戦争するのという風に疑問を呈した訳ですね」

水島「そうですね」

用田「これはA2／AD。この赤だけの中国のそのミサイル網だったのが、今度は青のロシアも加わって、恐ろしいのは潜水艦も一緒に加わるっていうことですね。潜水艦も一緒に加わると…」

水島「うん」

用田「所謂、接近どころの話じゃなくなると。これが恐らくアメリカとか中国が、アメリカが今、言っている2027年に中国が侵略するというのは煽られちゃいけないけども、警戒はしなきゃいけない。だけど煽られちゃいけないのは、2027年を境に恐らくアメリカの力が弱くなるのは明確に見えるようになったんです。これは伊藤貫さんも言われていましたけども、明確に見えるのが2027年っていう起点だと思います。だから自分も起点にして、早く戦争しなきゃ、いっぱい装備を買わなきゃ、日本は大変なことになるよという風に今、煽られているのはそうですね。

だから中国は、どうするって言った時に、未だ考察の域は出ませんけども、中国自体は強い軍隊か張子の虎かと言ったら、私は今、張子の虎じゃないかと思っているんですね。それは、これだけ汚職があって虎の子のミサイル部隊が、あれだけ上げられて全部、潰されていって、戦える環境にはないですよ

水島「うん」

用田「それから汚職が蔓延して、階級も金で買う、一人っ子政策で軍は弱体というものを、台湾で戦えば米中は共倒れってというのが、僕は別にミヤシャイマーに傾倒している訳じゃないけども、彼らの意見からすると、いや、これは共倒れだと。だから、どっちがやっても駄目だと」

水島「うん」

用田「南シナ海の方が危ないと、こう、はぐらかすっていう訳ですね。グローバリストは、金を儲ける為には、その戦争ビジネスの為には長期間、戦争、危ない、危ないという状況が続いた方が、物が売れる訳ですよ。このものの見方は悪いかもしれないけど、事実として、ウクライナで、よく見えた形ですよ。死んでいるのはウクライナ人だ。死んでいるのはアジア人だ。痛くも痒くもないですよ」

水島「うん」

用田「やっぱり、ここが違う。大切なのは、このウクライナの教訓ですね」

水島「うん」

用田「これは、どっと中国に入っていく。先程も、ちょっとお話があったように、AIとかUAV、無人機とかロボットですね。凄いですよ。アメリカや中国のロボットの技術というのは今、工場とかそういう所では人間の代わりにロボットが歩いて、まあ、デモンストレーションかもしれないけども、それが全部、片付けていくという画だとか、それから、深圳で1万基のドローン。1万基かどうか知りませんが、いや、相当な数です」

水島「うん」

用田「これを多分、AIでコントロールしているんだけど、龍の形を作ったり変化して何の形を作ったり、私は驚きましたね」

水島「うん」

用田「これは戦って…」

水島「編隊飛行と同じですからね」

用田「そうです」

水島「はい、飛行機のね」

用田「それが、ちゃんと統制がとれて動くんですよ」

水島「うん」

用田「だから何を言いたいかと言うと、AIとかUAVとかロボット、要するに、人間が弱いんだったらロボットを使えと。中国は漁船とか、そういうやつをいっぱい使う訳ですよ」

水島「うん」

用田「だから、あれで機雷を落として港を封鎖するんですよ。東京湾だとそうなる訳です。そういうものを組み合わせると、全く次元の異なる戦い方をする為の時間が必要なんだろうということで、今、私は至急、ロシアの教訓と、その技術を入れて、中国軍は今、造り変えているんじゃないかなという風に思っているんです」

水島「当然でしょうね」

用田「直ぐにやりはしないけども、例えば、その中で一番、弱いのは何処かって台湾じゃないんですよ。南西諸島ですよ。宮古とか石垣とか。こういうところは、もう奥行きも無いし、守れる術も基本的にない訳ですよ」

水島「うん」

用田「これに対してやるのは、電磁波とか、そういう話になって来るんですけども、まあ、これで喬良少将というのが2020年に、大体、戦争をやっても勝てないよと。そのグレーゾーンを使いながらアメリカを追い込んでいくことこそが、中国がやるべきことだというようなことを、将軍が言って、中国で生き延びた奴は居ないんです。ところが、これ、生きていますよ。軍隊は、それを支持しているということです」

水島「うん」

用田「今やっても戦うことは、ちょっと出来ないなということで、台湾なんか基本的に今、議会の与党は国民党じゃないですか。そうやって内側から内部放棄をしていく。或いは、その戦い方の次元を変えてしまうと。上陸用舟艇とかそういう部分の話では、全く無くなって来る戦い方になるだろうと。だから2027年というのは分かりません。もう一回、分析しないといかんけども、米中の軍事力は、アジアに於いて逆転するんだろうなと」

水島「うん」

用田「台湾危機説は、ネオコンなどの戦争屋のグランド・デザインかなと」

水島「うん」

用田「ただ、我々にとっては、本当にそうだというものもあるんですよね。今言ったアメリカと中国のものの見方からすると、お互いを敵にしないで、お互い助け合った方がいいよと、トランプは言っていますよね。やっぱり戦争しないという風に、1期目は分からなかったけれども、2期目は戦争しないと言って大統領になる訳ですから、戦争を追求するんじゃなくて経済的に締め上げるかもしれんけども、やらないかもしれない。そうすると、どうする。日本は、こうなるんですね。トランプは中国とは経済では戦っても、戦争はしない」

水島「うん」

用田「言い切っているのかどうか、私もちょっと分かりません」

水島「まあ、しないでしょねえ、はい」

用田「中国も米中戦争は自滅の道であることを自覚し、今は選択しない」

水島「はい」

用田「2028年迄、トランプは大統領に居座るんですよ。だから習近平は、それ以降にも未だ居座ろうと思えば居座れるんですけどね。2030年を目指して。まあ、そこがあるんで、暫くはお預けなのかなあと。」

一方で、近隣の周辺国である日本は、アメリカが衰退し、或いは、後退戦略を執るとというのが、しっかり見えて来た。私は、後退戦略を執るというのは、もう見えているんです。グローバリストが手を握れば、中共の脅威に直面して中国の拡張主義に飲み込まれる。それを避けたいと思うなら戦うしか無いし、勝たなければならないということで、明日、戦い方のことについて話をしますけども、戦う気があるなら、戦う体制を今、短期間の内に揃えなきゃいけないと」

水島「うん」

用田「だから米中のものの見方と、第1列島線にへばりついて、これが日本の国だということと、第1列島線は、先程、申し上げた前進陣地は大切だけど、やがて捨てる陣地だということと、そこに死んでまで死守するという日本国民とは違うと。まあ、日本国民も、かなり逃げる奴も居るかもしれないけども、だから物の見方、これを両方、見ていないと、アメリカが全部、助けてくれると思ったら大間違い」

水島「そうですね」

用田「だから核についても、結局は自分で持たざるを得ないという結論にいかざるを得ないんじゃないかっていう風に思いますけどね」

水島「そうですね。それを持たないと、もう何も出来ないっていうことが解かるんですけど、今のお話を聞いて、私はね、今回、岩屋さんがアメリカの国務長官と会う前に、中国の外務大臣に会いに行くっていうものを考えた時、未来の日本の姿、これは伊藤貫さんも言っているけども、やっぱり中国の属国化していく、或いは、もう一つ言うと、丁度、アメリカとしては前進陣地的な問題で、ちゃんと関係は持つけども、全然、助けもしないしね、つまり、ここは草刈り場になって両方共、いいように使う。

今回、大阪のIR、万博のことで、我々は関わって、ずっと運動をやっているんだけど、IRを見ると、MGMが入って来るでしょ。それから、サンシティグループっていう香港の

中国マフィアとか、こういう系統が今、北海道やニセコとか色んな所に入り込んで、土地や企業を買い取っている。つまり大阪都構想っていうのは、実は、MGMっていうのは映画で有名だけでも、実際には中国企業も入った国際コングリマツトというところですよ。

だから、そのIRという国際カジノをやるという形の中で、大阪、兵庫、維新の連中っていうのは完全に向こうにつくられた、ディープステートが創った政党ですから、あの大前研一、竹中平蔵、そして実際のオーナーは、今、おかしくなっちゃっている菅義偉さん。維新は、全く自民党の別動隊ですよ。

だから、こういう人達が今、何をやっているかって言うと、今、お話し戴いた日本の未来の姿っていうのは、完全に中国とアメリカにいいように利用される。それで、お互いに、ここは折り合いつけようぜというような形で、上手い事、やろうよと。こいつら、よく働かし、金を稼ぐかも分かんないから、どれだけ吸い取れるか、華僑も入って来るわ、アメリカの企業もどんどん入って来るわってね、政治的には政治家は馬鹿ばかりだから。だから、もう、そういう状態で、本当に日本は草刈り場になっていく。

だから、それでも、まだ、今、うちの石破さんは日米安保の深化みたいなね、30年前に言いそうなことを、ずうっと言い続けているっていうね。この現実を見ると、もしかしたら、本当に岩屋さんが中国の外務大臣に先に会うのは、もう一つのねえ、あとで考えると、あれが中国の属国化への道だったと。

戦後80年を見ていると、何と言うことを聞く連中だろうと。伊藤貫に言われて、私は悔しかったけど、戦後の日本人は世界で一番、卑怯で臆病者の国民になった。世界で一番って言われて違うぞって言えない悔しさがあつただけだね」

富岡「サミュエル・ハンチントンがね、『文明の衝突』で予言していますね。日本はアメリカの属国から太平洋を挟んで中国の属国になるということをね」

用田「その話に関して、ちょっと1枚だけ足して言うと、これは出すまいと思ったんだけど、日本は今後、どのような枠組みで生存を図るのかと言った時に、今、国会で本当に議論しなきゃいけないのは、これから日本はどうやって生きていくのと言った時、親中、これは私が親中って書いたの、ちょっと、便宜上ですけどね、でも、これはアメリカが後退して、併せて中国の緩衝地帯になっていくということは選択肢として、いやいや、執るという意味じゃなくて、並べる選択肢として、国民が判断しなきゃいけない選択肢として一つあるんだなと。もう一つは中立ですね。でも、これは、非常に難しいと言いながらも核武装中立」

水島「うん、難しいですね」

用田「もう一つは、親アメリカとロシア。これは対中国を完全に包囲をして戦うというところに於いて、協力はするけれども核武装は必要だと。目の前に中国が居ますから。要するに、そういうものの組み合わせの中で、本当なら昔のアテネだったら、公表して、国民に、どうするか、我々の生きざまは、これとこれをやって、リスクはこれがあると。だから、我々の、俺はこれがいいと思うんだけど、国民の皆さんは、どうだというような議論が、全く無い訳ですね」

水島「無いです」

用田「だから、正に、こういう根本的な議論、でも、このロシアを敵にするっていう選択肢は無いと、私は思っているんです。それをやることで、日本は絶対に生き残れない。三正面、

敵に回す訳ですから。これは前から申し上げているように、絶対にやってはいけない。だから外交上、何を正さなきゃいけないかと言うと、もし石破さんがトランプに会いに行くなら、ロシアと修復しましょう。修復しましょうぜという話なら意味が解るけども、今の日本のままでいくと、経済界だとか世界経済フォーラムなんていうのはグローバル資本であれだから、親中国な訳ですね。だから緩衝帯なんて、あながち無いとは言えない、今、おっしゃった通りですね。じゃあ、それは議論させなきゃいけないですよ」

富岡「そうですね」

用田「突きつけて本当にそれでいいのかっていう議論をしなきゃいけない。まあ、そういう議論は…」

富岡「そのまま行くと、ケース1っていう最悪の形でね。最悪ですよ（苦笑）」

水島「だけどね、私は、さっき、ちょっと言った話で言うと、拉致問題っていうのは、拉致問題の解決っていう形で言うと、プーチンもトランプも北朝鮮も抱える」

用田「はい」

水島「そうすると、どうですか、日本、アメリカ、それから北朝鮮、ロシア。そうすると、知らない間に形として中国包囲網が出来るといような、イデオロギーとか、その国の体制とか、そういうのを無視してやるぐらいの感覚で、そうすると拉致問題を、みんなで解決つけたというようなことになると、これは結構、ロシアとの修復とか新しい一つのきっかけになって、プーチンさん、有難う、トランプさん、有難う、おお、金正恩、お前は気に入らないけど、まあ、とにかく、一応（苦笑）」

用田「いや、荒木さんが先程、言われたんですけども、正にロシアと結んでトランプと手を繋いじやうと、北朝鮮も手を繋ぐから、中国は待って、俺も入れてねという話をされたじゃないですか」

荒木「そうですね。やっている方の立場から言うと、取り返せれば何でもいいですから」

用田「うん」

水島「そうですね」

荒木「それも北朝鮮の中で協力してくれる人が居ればいいし、それも中国とだろうとシオニストだろうと、もう何でもやりますよ。とにかく結果を出せばいいんであって、どっちにしたって拉致問題に解決なんかあり得ないです。だって拉致をされている途中で殺された人とか、間違いなく居る訳です」

水島「ああ、そりゃそうですねえ」

荒木「それ、どうするかっていう話になった時に、今、帰って来ている人達だって24年間、だから、今、残っている人達はもっともっと、ずうっと長い間、居る訳で、そういうことを考えたら、もう進展はあっても解決はあり得ない。でも、その進展の為に何でもしなきゃいけないから…」

一同「うん」

荒木「だから、それは、まあ、私なんかは、国際的なそういう構造の事っていうのは分から

ないので、ただ、もう出来ることは、やっぱり、そういうことをやっていくことが最終的に、あとから考えたら、そうだったという風にはなるかもしれないと思います。だけど、自分としては、とにかく協力して貰えたら、中国でも何でも私はやると思います」

水島「そうですね」

荒木「今、まあ、昨日も衆議院の拉致問題の特別委員会があって、私も傍聴に行ったんですけども、それは、まあ、もうちょっと何とかしてくれないかという思いはありますけれども、でも、それは国会議員の中だって、やっぱり色々考えている人が居る訳で、どうせ、国会議員のレベルなんて、我々のレベルと同じですから、基本的には国民のレベルが国会議員のレベルなので、だから、我々は、みんな、そんな物凄い博学で見識があってという風にならない限りは、国会議員は、そんなに、ちゃんと議論してくれるなんていうことは、まず、あり得ない訳で、恐らく戦前だって、大体、そんなに大差はなかったと思うんですね。

ただ、その戦前の場合は、戦争するかもしれない、或いは、戦争しているという、そういう緊張感があった分だけ、それは、もう全然、違いますけども、そういうことになれば、やっぱり変わって来るものは、当然、あるだろうし、間に合うかどうか分かりませんが、だから本当にグローバルで考えて今、世界がこういう風に動くということで考えている事と併せて、現実の問題、どういう風にするかということっていうことから、ものを解いていくということも考え方として必要なんじゃないかなあとと思いますね」

水島「そうですね。でも本当に、そういう意味で未だ生き残って頑張っている同胞というか、そういう人達を奪還する為にも、具体的にやっていかないと、だから繰り返しになりますけども決意表明はいいと。国会議員のそんなもの聞きたくないっていうことがあると思うので、今回、トランプの政治っていうのは実は逆に非常にプラグマチックな、現実的な対応、その個々の部分に対してやっていくんじゃないかなあと。パナマ運河まで寄せさせていうねえ」

一同「(笑)」

水島「グリーンランドまで売れとかね。ガンガン言っていますからねえ」

石田「そうですねえ」

水島「うん。アラスカだけじゃなくてねえ。だから、そういう意味で言えば、そこまで言ってみて、どうだっていうね、こういうディールの達人というか、そういう軍事力のあれが無いけど、もし核武装のことを政治家が言えるようになったら大分、違うと思いますね」

石田「うん」

水島「その問題、私も拉致の問題で言うと、影響力というのは核の問題を日本人が言えるようになれば大分、違うっていうか、ああ、本気で平和や安定というものに対して日本は関わろうとして来たっていうね。それは、もう我々はキッシンジャーから始まって瓶の蓋ですから、だから邪魔されることは勿論、あるけどもね」

富岡「いや、さっきの1以外で2、3であれば、核武装というのが大前提になっている訳ですよ」

水島「そうだな」

富岡「それはね。その議論が出来るかっていうことですよ」

水島「そういうことですねえ。昨日、矢野さんっていうね、よくチャンネル桜の討論番組にも出て貰っている彼は、ずっと核武装論者だけど、やはり潜水艦隊を創るっていうね。まず、一番、手っ取り早くやるのは、そんな戦略的な核とかね、そんなに直ぐに用意出来るわけがないから、まず、持つという意識。もっと言えば、発射装置のある原子力潜水艦だけ造ってもいいぐらいですよ。核を積んでいなくてもね。いつでも、こう、ガチャンとパッケージで積むことが出来るみたいなことが出来ていれば、もう、それだけでも抑止力になるっていうか、ああ、日本は本気だなというね。

そして、もう一人の矢野さんという潜水艦隊司令の話によれば、2兆円あれば5年でドックまでつけて4隻は造れる。だから43兆円も使うような軍事予算なら、8兆円使えば日本は16隻の大原子力潜水艦隊が出来ると。ということになると、太平洋の中で、大分、雰囲気違ってくるというね。やっぱり、皆さんの意見も聞いてみたいと思うんですけど、来年ね、とにかく日本国民の覚悟が必要なんですよね」

一同「うん」

水島「それ、ちょっと、先程、おっしゃったので、一言ずつ言って戴ければ」

用田「ああ、一言。まあ、一言で言うと、こうです」

水島「はい」

用田「今、日本に必要なのは改革ではなく革命だ」

水島「うん」

用田「私が革命っていうと、おいおい軍事力なんかを使うかと、こういう風に言われそうで、今迄、言いませんでしたけども『日本の生存に関わる大議論』と。喧々…侃々諤々って言うんですか」

水島「はい。どっちも言います」

用田「ですよ。その議論をしなければいけないということで、まあ、明日もお話をしますが、核というのは最後の横綱は潜水艦に積んだSLBM」

水島「うん」

用田「戦略核でしょうけども、いきなり、その道筋迄には行かない可能性が非常にある訳ですね」

水島「うん」

用田「だから、やっぱり現実的に我々は今、自衛隊が陸海空として、この十何年間、揃えて来たのは対艦ミサイルですね。船を沈めるというやつ。これを、やっぱり千発、今度、持つ訳で、これは陸海空で同じ弾を持ちますから、そうすると、この東シナ海、南シナ海に居る殆どの中国の船は全部、アウトですよ。昔で言う旅順港と一緒にです。

それで電磁波を組み合わせて、電磁波でパアッと照射すると、基本的に動けなくなる訳ですね。だから、そこら辺のことを今、やることを、しっかりやるっていうことと、もう一つは潜水艦。潜水艦は原子力潜水艦の攻撃型ですね。日本は攻撃型の潜水艦が無いというのが致命的です」

水島「そうですね」

用田「だから、まず、これを持たなきゃいけないということと、それから、その次の段階が、前から申し上げています電磁波。EMP弾。電磁波をバァッと光らせると。これをやると、相手の衛星通信網をも破壊できるし、それから都市部についても、人を殺さないで無力化出来ると。或いは、船も何百キロ、何十キロに渡って全部、無力化出来ると」

水島「うん」

用田「これだけの弾を持つだけでも全然、違うんですね」

水島「そうですね」

用田「あとは戦術核。伊藤貫さんが言われていますね」

水島「うん」

用田「これは、やっぱり次のカテゴリ。この戦略核とか、SLBM、戦略核というやつは懲罰的抑止。拒否的で非常に使うという話じゃなくて、これで何かあったら最後は懲罰と」

水島「うん」

用田「それは、我々も、それを喰らう訳ですから、日本は一瞬にして滅びると」

水島「相打ちですからね」

用田「相打ちです」

水島「はい」

用田「相打ちにするようにと。だから、そういう意味での駆け引きの最後の横綱、王手は、絶対に必要ですけども、造る順番とすれば、今言った様な現実的なものを積み上げていかないといけないし、尊敬する原口先生とも、この話については、やっぱり議論しないといけない部分もある訳ですね。だから、これは、やっぱり、それで選択だと思うんです」

水島「うん」

用田「選択を。でも少なくとも電磁波だけは絶対に必要だなという風に思っています。まあ、ちょっと細かくなって申し訳ありませんけども、そういう工作が必要だと思います」

水島「今言った具体的なことで言うと、もう一つ、ウクライナで、或いはイスラエルのパレスチナ戦争で判ったのは、話して聞かせて殺人をやめる人ばかり居ないというね、話し合いや平和を願う祈りの心で平和は来ないってことだけは身に沁みて、我々は解ったっていうはずですけど、日本人は未だそこへは行っていませんね。荒木さん、どうぞ」

荒木「はい」

水島「これからの」

荒木「今の社長の話の逆になっちゃうかもしれないですけど、でも、とは言っても日本人には、その感覚っていうのは基本的に、やっぱり分からないですよ」

水島「侍は、どうですか」

荒木「うん。だから日本人って、我々、民族と言語と宗教と領土と、だから大雑把に、大体、重なっている、恐らく世界中でも、まあ、ここしかないだろうと思うんですけども、また、逆に言うと、日本人って、みんな、世界中、そういうものだろうと」

水島「うん。ほんとですね」

荒木「それで地面の上の国境っていう感覚も無いし、だから何となく、みんな、それぞれで、自分が平和に暮らせればいいということで来ている訳なので…」

水島「そうですね」

荒木「だから、中々、今日、正に議論したような国際関係の凄いダイナミズムっていうのは、もう本当に理解するのが、正直言って中々難しいんじゃないだろうかと」

水島「ああ～、そうですね」

荒木「だけど、逆に言えば未だ自分でも結論、出ないですけどね、自分でも結論は出ないけれども、でも日本しかないものっていうのはある訳ですから、それは、その侍の精神なのか分かりませんが、何か我々だけに出来る、他の国で出来ないものというのがあるんじゃないかなあという気がします」

水島「そうですねえ」

荒木「ええ。だから、それは本当にいざとなったら、もう命を捨ててもやるんだということとか、そういう採算度外視にしてやるようなものとか、そういうことが何かあるんじゃないかなあと思うんですよね。だから、自分の場合は拉致ということですけど、別に何のことで構わないんですけども、そういうものが見せられることによって、日本っていう国に手を出したら危険なんだとか、まあ、それは何をされるか分かんないというようなことを思わせればいい訳なので、ちょっと全然、具体的じゃなくて申し訳ないですけども、そういうようなもの、やっぱり、自分達が得意な分野というのを、もう少し、国際的に通用するような形にもっていくって努力が必要なんじゃないかなあと、そんなことを思いました」

水島「そうですね。丁度、最近、講演とか何かでも言わせて貰っているのは、縄文時代が1万6千年、争いが殆ど無くて1年以上、最近、1万6千年って言われているけど、1万6千年も他のエジプトのインダス、或いは、ナイル、エジプト文明や黄河、ユーフラテス川のね、ああいう文明は5千年以下で、みんな、争う中で滅びているんだけど、日本は1年以上、これ、奇跡のような…」

シュラー「うんうん、うん」

水島「遺骨の中に争った頭の傷や体の傷が全然、無いっていう、そういう1万数千年、全く平和で暮らして来た。この列島の好条件があったんでしょけども、でも、この国のね、今、おっしゃるように他の国の人とは違う現実の歴史を持っているっていうねえ、これを言うと、本当に考え方がね、おっしゃる通りのところを、どうやって現代のそういう争う人達と、折り合いをつけるかっていうねえ、そこだと思うんですけどねえ、はい。シュラーさんは、どうですか」

シュラー「そうですね。特に用田さんのおっしゃったことです。軍事的に自衛隊は潜水艦を中心にしてとか。でも私は将来、皆が軍人」

水島「うん」

シュラー「国の為の、まあ、英語を直訳すると何て言うの。National Service っていうか、国の為に軍隊に入るか。例えば二十歳になると2年間、軍で訓練する。それとも農業」

水島「うん」

シュラー「それから介護でも。外国人を招聘して介護をやっているなんて、No, No, No, No、日本人には、皆そういう義務がある」

水島「うん」

シュラー「これが日本人のアイデンティティとして、それは何ですかって言うと、誇りを持つように」

水島「うん」

シュラー「あと、私も努力しているけど、今、この前の戦争、大東亜戦争の時のプロパガンダが間違っているの。歴史を教えている日本は、それに恥じるものはないですよ」

水島「うん」

シュラー「無い。日本人の意識を変えるっていうことも大切だと思いますからね」

水島「そこが、まだね、本当に80年も経つんですけどねえ」

シュラー「うん」

水島「全然、変わっていないですもんねえ」

シュラー「変わっていない」

水島「もう、その教育は今、テレビでも何でも、今でも未だ8月15日が来る度に、そういうのをねえ…」

シュラー「日本軍が悪い事を色々したとか何か…」

水島「そうそう、そうそう。はい」

シュラー「でも戦争は本当に残酷な事ですよ」

水島「うん」

シュラー「私も情報部局を色々見たんですよ。あまり言わないけれど、でも変な事を見たんですよ。あと、僕が居た軍隊の半分の海兵隊は、ベトナムに行ったんですよ。たまにビールを飲みながら話が出て来る。いやあ、私が殺したとか、酷かったなあとかね」

水島「うん」

シュラー「ありますよ。ありますよ。しかしね、そういう日本の誇りを持っていないとかね、国の為に努力しない。努力するという気持ちがないと、日本は消えるかもしれない」

水島「うん、その通りですね」

シュラー「だから、これは絶対に必要」

水島「はい。では富岡さん、お願いします」

富岡「はい。今年は被団協がノーベル平和賞を受賞しましたね」

水島「はい」

富岡「ですから、これを機に日本人が核抑止論っていうものを、被団協の平和論、ノーベル平和賞を機に、本当に議論したらいいと思いますし、しなければならぬ。ですから核抑止論の先に、どのぐらい先かは分からないですけど、人間が核兵器を手放す」

水島「うん」

富岡「ですから、まず核抑止論を徹底的に議論すべきだっていう風に思います。やっぱり、それはやっていかないと、さっきの用田閣下の2、3は、それが大前提なので、1にはなりたくないと思うんですね」

水島「そうだよなぁ。そっちの可能性の方があっても分からないけどね」

富岡「中国の属国にはなりたくないということを、日本国民に聞きたいですね」

水島「うん」

用田「意思表示を、ですね」

富岡「意思表示を。うん。今、いっぱいインバウンドで中国人が来ていて（笑）」

水島「いやあ、おっしゃるように」

富岡「もう、もっと、もっと増えることになりますよっていうね。うん。京都も全部、中国人ですよ」

水島「うん。あの日産とホンダの合同っていうね」

富岡「ええ」

水島「これも、どういう形か、もう苦し紛れの策だっていうことが言われているのと、もう一つはラピダスっていう半導体の凄い上位の会社の件は、私達は北海道で調べていますけど、原発を動かさない限り100%不可能な訳ですよ。半導体の製造は、電力を物凄く使いますから。それは全く準備されていない。それから水の問題も、千歳川の本流と支流を使うって言うけど、じゃあ、その辺の水を使う農業や飲み水や色んなものの、そのフォローも全く出来ていない。大量に使うんですけどね。

こういうやり方を見ていると、1兆円、2兆円、使うって言っているんですね。今、工場をしっかりと造っているんですよ。だけど、本当に泊原発を稼働するつもりでいるのかっていうと、地元ではそうじゃないと言っている。知事まで、そう言っている。こういうやり方しているのを見ると、ほんとにねえ、日本人の知的なレベルというのかな、判断力の低下っていうのは凄いなあというねえ、だからカルロス・ゴーンが日産とホンダが一緒になったって強いところはお互いに強いし、弱いところは、みんな、共通しているから補完にならないよなんて偉そうに言っているけど」

富岡「そうですねえ」

水島「確かに、それだったら本当に分かっているのかっていうね（笑）」

富岡「お前に言われたくないよっていう感じはしますけどね（笑）」

水島「いやあ、ナショナル、パナソニックやサンヨーとか、みんな、消えちゃったじゃないですか。ソニーも凄く小さくなったしね。昔は世界でナンバーワンと言われていたのがこういう状態ですから、おっしゃるように色んな意味での全面的な見直しが必要ですよええ」

富岡「それから令和7年、来年1月14日が三島由紀夫さんの生誕百年です」

水島「ああ、そうですねえ、うん」

富岡「三島さんが55年前に自衛隊で憲法改正を叫んで、それで、その彼が昭和45年でしたけど、その夏に産経新聞に書いた文章で…」

水島「ああ、そうですねえ」

富岡「最後に、こう言っているんですね。『私は、これからの日本に大して希望を繋ぐことが出来ない。このままいったら日本は無くなってしまわないかという感を日ましに強くする。日本はなくなって、その代わりに無機質な、空っぽな、ニュートラルな中間色の、富裕な、抜け目がない或る経済的大国が極東の一角で残るのであろう。それでもいいと思っている人たちと、私は口をきく気にもなれなくなっているのである』まあ、この経済大国も無くなってね…」

水島「そこだけ違っているけどね」

富岡「30年以上、経っているんで、ただ、まあ、日本列島は残っていますから」

一同「うん…」

富岡「うん、日本民族は今のところ残っていますから、だから一方で、やっぱり、この憲法の改正と核抑止論っていうのを、しっかり議論すべき時に完全に来ていると思いますね」

水島「そうですね。はい。有難うございます。じゃあ、石田さん」

石田「はい。来年、戦争が終わるのかどうかっていうところを話したいと思うんですけど、トランプさんが1日でウクライナもイスラエルもね、戦争を終わらせるとは言っています。ウクライナの方はシナリオが大体、何となく見えるんですね」

シュラー「うん」

石田「ドンバスとクリミアもロシアにあげなさいよと。ドニエプル川から、こっち側はロシアが載いて、ウクライナにはNATOには入らないよって約束して貰って、ゼレンスキーには何かお金を握らせておけば終わるかなという感じするんですよ」

一同「(笑)」

石田「シナリオが大体、読めるんですね。ロシアも絶対、譲れない部分ってあるし、ゼレンスキーは何が欲しいのかって、多分、金さえ貰えれば、っていう話になっちゃうと思うんですよ。それで読めないと言うか、読み難いのがイスラエルですよ」

一同「うん」

石田「イスラエルは、さっき言った様に、とにかく大イスラエル構想っていうのを推進しているイケイケどんどの内閣ですし、じゃあ、トランプがネタニヤフと、どういう取引材料を出して来るか。どういうディールを行って戦争を終わらせるかですけど、最近、ここ一日、二日の中東のニュースを観ていると、一応、ガザの停戦合意っていうのは大分、纏まってきたっていうニュースが出ていて」

水島「うん」

石田「これはハマスもネタニヤフも一応、双方から大分、詰まって来たぞおみtainな発表は出ているんですよ。その上で、恐らく、じゃあ、ガザは停戦合意に向かうのかと言っても、別に今週、来週じゃ中々難しく、今、イスラエルがやっているのは、もう本当に、さっき、水島さんがおっしゃったように最終仕上げの段階というか、これまで以上にガザとかでの戦闘が激しくなっているんですよ。

そんな中で、とにかく奪えるだけ奪っておいて、もう交渉の材料も向こう側が出せないような状況まで、とにかく追い詰めて、ガザは最終的に停戦合意だか飲み込むんだか判らないけど、一応、戦争は終わりましたっていうような感じにもっていくと思うんですね」

水島「うん、駐留軍を残すなんて言っていますもんね」

石田「ん？」

水島「イスラエルは駐留軍を残すって言っていますね」

石田「そうですねえ。フィラデルフィ回廊っていう所も結局、イスラエルが、もう周りを、ずうっと囲うようになってっちゃうので、ガザの内側に居る、そのガザの人達は本当に、もう、明日、明後日、命が無いかどうかみたいな、そんな状況で何か飯も無いし、水も無いしという状態でね」

水島「うん」

石田「まず、とにかく命を繋いでいるっていうだけなので、また、あの辺からどんどん難民化が出るなり、命を落とすなりっていう形に今、実際、向っているんですね。そこで、だからトランプが大統領になったあとにネタニヤフと交渉する材料として、多分、ネタニヤフが絶対的に欲しいものっていうのが、まず恐らく身の安全の確保とか、逮捕されないとか殺されないとかね、そういう自分の安全の確保」

水島「うん」

石田「そして、ある程度の領土を保証する事」

水島「うん」

石田「ゴラン高原とかヨルダン川西岸のガザとかの土地ですね。もう一個がバイデンの時に、進めかけていたサウジアラビアとの国交正常化。サウジによる国家承認」

水島「うん」

石田「これはネタニヤフとしては喉から手が出る程、欲しいんですよ。何故かと言ったら、

もう、イスラエルはここまで大虐殺やっちゃって完璧に孤立しているんだけど、その孤立を少しでも和らげるのが、まずサウジアラビアですよ」

水島「まあ、そうですね」

石田「凄く残念な話ですけど、サウジアラビアは元々パレスチナの大義って言って、パレスチナの国家主権とかパレスチナ人の主権を一番、最前線で、一応、その大義を言って来たアラブ系のリーダーだけど、そのサウジが、もうパレスチナの大義は諦めてるんじゃないかと」

水島「うん」

石田「諦めて、結局、このガザ停戦したらイスラエルの国家承認をしてもいいですよ、みたいなね、サウジアラビアはパレスチナに対して、そこまでガクンと熱量が無くなっちゃって、そういう何か取引材料がガクンとハードルが凄く下がっちゃったんですよ、

そのサウジアラビアとトランプは仲がいいので、サウジを巻き込んでプーチンも巻き込んで、ある程度、ネタニヤフの要望を聞いてあげて戦争を終わらせるっていう、まず戦争を止めるという実績をつくる為にね、結構、沢山の取引材料を出して来るんじゃないかと思うんですよ。

でも、じゃあ、国際社会が、それを許すのかっていうねえ、ゴラン高原とかガザとか、あの辺は全部イスラエルのものですよおと言った上で、これで戦争が終わりましたっていう状態で納得するのかなんですけど」

水島「そうだね」

石田「そこは中々厳しいところだと思うんですよ」

水島「うん。そうですねえ」

石田「だから、それに代わるネタニヤフが喜ぶ取引材料をトランプが出せるのかどうか」

水島「うん」

石田「そのディールの材料をね。そこが中々読めないところだけど、多分、ひょっとしたら、トランプの中には何か物凄い飛び道具的なアイデアがあるのかもしれないなっていうことを、ちょっと期待しているんですけど、このイスラエル戦争が終わるシナリオっていうのは、何か無限に色んなパターンがあるなと思っています。場合によっては凄く複雑に色んな国が巻き込まれるし、サウジアラビアなんかは今、相当、ぐいぐい引っ張られているのではないのかなっていうような、そんな感じですよ」

水島「なるほどね」

石田「そうになるとね、相当、中東のパワーバランスが変わってきますね」

水島「そうですね」

シュラー「うん」

石田「場合によってはイスラエルが結構、ガツンと上から抑えつけるような、そういう構造にもなり兼ねないし…」

水島「そうですねえ、支配構造ですよね」

石田「支配構造」

水島「なるほどね。はい。もう一つ、せっかく言ってくれたので、私から、イランは妙に、ずっとおとなしいじゃないですか」

石田「うん、おとなしいですね」

水島「これは多分、確実に反撃できる核兵器を地下で造っているらしいから」

石田「うん」

水島「これが使える迄は、じっと我慢の子っていうね」

石田「うん」

水島「そういうようなことをやるんじゃないか。イスラエルには潰されない限りは今、経済制裁とか色々受けているじゃないですか」

石田「うん」

水島「あれが段々なくなっていけば、おとなしくしておいて」

石田「うん」

水島「核兵器を確実に造っちゃうっていうね」

石田「うん」

水島「そうなると、また中東の状況が、イスラエル自体が変わって来る」

石田「そうですね。だから、それを怖れているのは、実はサウジもそうですよ」

水島「そうですね」

石田「イランの核兵器を怖れているのはサウジで、一応、表向きはサウジとイラン、国交正常化しているんですけど、協力関係があるように見えるんですよ」

水島「やっぱり、そうですねえ」

石田「それを100%信用し切っている訳じゃなくて、サウジ側の立場としては国交正常化したんだけど、やっぱりイランは核兵器を持っている。しかも、シーア派の革命によって生まれた国じゃないですか」

水島「そうですね」

石田「一方でサウジアラビアはスンニ派の…」

水島「まあ、そうですね」

石田「また極端な、こっち側に居るワッハーブ派でね、そのシーアとスンニの両極に居て、相手はシーア派の革命国家で革命の波がサウジに齎されるのは困るから、相手が核を持っていてサウジが持っていないっていうのは、もう対等じゃないんですよ」

水島「うん」

石田「だからサウジとしては…」

水島「だから、持つでしょ」

石田「ん？」

水島「そうしたら持つでしょ」

石田「うん、そこはサウジが逆に喉から手が出る程、欲しいもので、核を持ちたい、これは、バイデン政権の時にも、イスラエルでも正常化を認める代わりにサウジは核開発する、その協力をして色々アメリカが認めてくれという交渉も、ずっとしていたんだけど、それは、去年の10月7日のイスラエル/ハマス戦争で全部、破談になったんですけどね。そこを、また出して来るのではないかなあと」

水島「なるほどねえ」

石田「イスラエルを国家承認する代わりとしてサウジが核を持つっていうことを、果たして、今度、トランプが許すのかどうかっていう」

水島「そうですね」

石田「うん。それはアメリカの議会の承認が必要になってくる話なので、そこをアメリカが認めるかどうかっていう、また、そこも凄く複雑に何か…」

水島「いや、それを認めちゃうと、今度はロシアがイランの核兵器を手伝っちゃうよ、みたいなね」

石田「そうなりますよね」

水島「ああ、北朝鮮とかね。まあ、その辺のところは、いやあ、だから中東っていうのは、本当に難しいね」

石田「難しいですね」

水島「ねえ」

石田「今、もう何か網の目のように絡み合っているの」

水島「うん。そうですねえ。ただ、それは本当に、実は外務省とか政治家はきちっとねえ」

石田「うん」

水島「まあ、石田さんの意見も聞きながら、しっかりやらなきゃいけないんだけど、どうも横着だっていう感じがしてしょうがないんだよねえ」

石田「うん」

水島「う～ん。まあ、というようなことですけど、はい。じゃあ、宇山さん、お願いします」

宇山「はい。来年は、このウクライナの停戦が本当に成立するかどうかというところが、焦点になってくると思うんですね」

水島「はい」

宇山「今、ゼレンスキーは、自分達の外交官らにNATOの加盟に向けて総力をあげるように指令をしている訳ですね。ゼレンスキーは先週、ベルギーのブリュッセルにも行きまして、NATOの指導者達に対して、ウクライナのNATOの加盟ということは必ず成されなければならないと。そうでなければ停戦には応じないということまで言っているんですけども、プーチン大統領はこれを絶対に認めないというように思います」

水島「そうですね」

宇山「それが故に、トランプ大統領も、この頑固なゼレンスキー大統領のことを憂慮してか、この間、7日にパリを訪問しました時に、マクロン大統領との仲介でゼレンスキー大統領とトランプ大統領は会っているんですよ。トランプ大統領はゼレンスキーに対してウクライナのNATOの加盟というのは、はっきりと出来ませんよと」

水島「うん、言いましたね」

宇山「こんなことは無理ですよというトランプ大統領自身の終戦の構想案について、きちんと説明をしている訳なんです。トランプ大統領が説明するまでもなく、これは制度的にウクライナがNATOに加盟するというのは無理なんだろうと思います」

水島「うん」

宇山「NATOに加盟をする為には、全会一致でないと加盟できません。親ロシアのハンガリーとかスロバキアは絶対に認めませんからね」

水島「うん」

宇山「そういう意味では、ウクライナがNATOに加盟するっていうのは、そもそも無理なことです」

水島「うん」

宇山「じゃあ、ゼレンスキーが、それに拘るというならば、ゼレンスキーを排除するしかないというように、私は思うんですよ。殺すか亡命をさせるぐらいしかないと思うんですが、ただ、一つ疑問はね、このゼレンスキーを排除したとしても、殺したとしても、本当に、停戦ということに纏まっていくかどうかというのは、中々難しい部分があると思うんです。と申しますのは、実は、この徹底抗戦をすべきだという考え方はゼレンスキーだけではなくて、ウクライナの中の軍部の中枢の人達なんかも、実は、徹底抗戦をしたいと考える人達も少なからず居るのではないかなと思うんですね。やっぱり彼らを説得できなければならない。例えば、つい先般、ロシアのイーゴリ・キリロフ中將が爆殺されましたね」

水島「はい」

宇山「ウクライナの手のものによって爆殺されたということがあったんですが…」

水島「そうでしたね」

宇山「あの事件を、どう考えるかですけども、やはり、これは停戦の交渉が為されるということを嫌うウクライナの強硬派が、キリロフ中將を殺して見せてね、もっと、この戦争をまだやるんだと煽って見せているという部分もあるし、もう一方で、ウクライナっていうのは、

大変な諜報国家です。自分達には軍事力が無いということの中で諜報によって、まあ、北朝鮮と同じです。様々な籠絡工作をしているということで、あのように入将の居場所を正確に知って爆殺させてみせるというのは余程、諜報力が長けていないと、やはり、こういうことは出来ないと思うんですよね。その諜報力を示したという部分もあると思うんです。

もし、この諜報力を示したということならば、停戦に向けて少しでも自分達が有利な条件を勝ち取ろうとしているということも考えられるんですけども、私は必ずしも、そういうことでもないのかなあと。やはり戦争を、まだまだ煽りたい人間が居て、こういう形でロシアの要人を殺してみせたという部分も否定できないのではないかと」

水島「うん」

宇山「そういった点では、トランプ大統領が言う程、簡単に、この停戦というのが、出来るかどうかというのは、中々分からない部分があるのではないかなという風に思っております」

水島「なるほどねえ。丁度、先週、私も、あのキリロフ中将の話をして、丁度、宇山さんと同じような見方をしたのは、バイデン政権が、これに絡んでいるんじゃないのかなっていうね。まあ、ウクライナの諜報力が凄くあるのかも分かりませんが、でも、いつ、何処で、行動まで調べて場所と時間を把握するっていうのは、CIAやMI6とか、こういうところと協力して貰わないと、中々ロシアの首都で、ということは、何故かと言うと、ウクライナがそれだけやるってことはEU諸国の首脳も全部、殺せるっていうことですよ。やれるっていうのは友好国ですから。

ただ、そういうことじゃなくて、逆に、さっき宇山さんが言ったように、殺す一つの段階で、ロシアは、ちゃんと報復するって言っているんですね。誰に報復するかっていうのは、ゼレンスキーかも知れないし、その腹心の部下とか有力者かもしれない。これを、きっかけに、ゼレンスキーをビビらせるか抹殺するか。これを何とか停戦のきっかけにしよう。つまり強硬に言っている連中が消えるっていうことは、少なくとも新たな停戦の一つのきっかけを、実はつくっているんじゃないかというね。

この殺し合いっていうのは、そこが凄くあると思うんですけど、みんな、トランプの暗殺を含めて、FBIやCIAとかって相当なプロでない駄目だと思うので、ウクライナがそれだけの力を持っているって言ったら、相当、敵国の首都で、それから化学兵器司令官ですよ。そういう人を殺すとしたら、相当な物凄い組織力、情報力を持っていなきゃいけない。私は、そこのところは難しいんじゃないかと。やっぱりCIAやそういうものの協力が無ければやれない。

ただ、それを受けて殺されたロシアの側の、ちゃんと一つのメッセージとして受け取っているということまで考えてもいいんじゃないかなあと、実は思っていますね。停戦の一つのきっかけっていうのは、ロシアもやられたよと。そうすると、何かこうなった時というような状況づくりが始まっているんじゃないかと。それで一番、やべえなあと思ったのはゼレンスキーだと思うんですけどね。自分がやって、よく新聞に出ていたように、宇山さんが言っていたように、これで状況を転換するなんていうことは出来ないですからね。

まあ、そういう意味では、我々が想像する以上に、情報戦、諜報戦、謀略戦が非常に進んでいるっていうね。これはシュラーさんは当たり前のことみたいな感じがしますか。

シュラー「うん。あと、彼らが選んでいる理由は、もう一つあるんですよ。アメリカの国内

のことで、そういうワクチンのことで…」

水島「はい」

シュラー「それでヴィクトリア・ヌーランド」

水島「うん」

シュラー「1年半前かな、そういう研究所をアメリカはウクライナの中で27か所も持っているんですよ」

水島「ああ、ありましたね、生物兵器研究所ですね」

シュラー「そういうことなんか、これから、はっきり話が出るかもしれないって。だから、彼を狙っていますよ」

水島「なるほどね」

シュラー「ね」

水島「う～ん。ああ、そういう面もあったのか」

シュラー「それもありますよ。あのう、色んな…」

用田「全部、調べて紙で一表にしているっていうか」

水島「ああ、そうですね」

用田「はい。しかし彼が亡くなっても、それをやった人間は未だ残っていますからね」

シュラー「だから、まだ残っていますよ」

用田「しかし象徴的に、ですね」

シュラー「ね」

水島「いや、今日は出ませんでしたけどねえ、生物兵器の問題は、実は、ワクチンの問題も、関わっていますよね。ファウチっていう人自体が、もう、あのう…ねえ。そういうことで曖昧にしておきますけど、それでレプリコン・ワクチンも今、先進国で日本だけです。世界で治験もやらないでね、アメリカとベトナムは治験をしたそうですけど認可はおろしていないけど、日本は早速、おろして65歳以上ですか。これは任意ですけども、もう始めているっていうねえ。こういうことを含めて、これも出る、ビル・ゲイツっていうのは、実は、これは大丈夫でしょうと思って言うんだけど、WHOの大きな支援者の一人だということも含めて、我々は国連とかWHOとか色んなもの自体が、公共的な平和と健康を願う国際組織だと思ったら全然、違うっていうのが今回、色んなことで分かって来たっていうのも、凄い話だなと思いますね。

というようなことで、今日は、皆さん、私も大変、参考になりましたけれど、今年の総括ということで、ちょっと長引きまして申し訳なかったんですけど、討論を終わらせて戴きます。有難うございました」

一同「有難うございました」

***** お わ り *****